
青輝のラジエル

秋月スルメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青輝のラジエル

【Nコード】

N5123T

【作者名】

秋月スルメ

【あらすじ】

世界中で数億ものプレイヤーがいるとされる大人気VRMMOアルカディア。そのゲームでトッププレイヤーの一人だった少年カイルはある日、異世界へと逝ってしまった。しかもそこはゲーム世界の……一万二千年後！？

深まる異世界の謎、人類自身に秘められしテーズ。さらに遙かな時を超えて蘇った正体不明の生命体が、世界を原初へ還そうとする……。

そんな混沌とした世界でカイルはたくさんの美女や美少女と出会い、冒険者生活を始めた。果して彼の行く末に待ち受けるのは一体なんなのだろうか……。

最強の少年が行くテンプレ系ハーレムファンタジー、開幕です!!

プロローグ

焼け付いた雲が空を占める。世界は紅く、鉄臭い。まるで血で満ちているように。広がる荒涼とした大地は余地なく屍に覆われ、幾万もの亡者たちが生者を呪う。時おりリンが燃える青みがかつた炎が彼らの身体を焼いては、その叫びはいっそう憎悪にあふれるものとなった。

その様子はさながら地獄。神はタルタロスの門を開いたのか。幾千ものネビームたちが予言した最後の時が訪れたのか。真実は神ならぬ身にはわからない。されど、そう間違っほどの凄惨にして荘嚴な世界が広がっていた。

少年はその光景をどこから見ていた。それはさながら超越者の視点のようで、どこを見てもピントがぼやけたりすることはない。少年の視界いっぱいにつごめく亡者や紅い空が広がる。

「なんだよこれ……。何なんだよ！」

本能的な恐怖と不安に掻き乱される少年の頭脳と魂。彼はわけもわからずに叫び、もがく。理性はふわふわと飛んでいつてしまったようで、その姿はさながら獣だ。

唐突に、少年の意識が遠のいた。快い眠気が彼を襲う。彼はたちまちのうちに睡魔に降伏して、身体の動きを止めた。すると一瞬で、彼の意識は白い眠りの世界へと旅立ったのだった。

「はあ……。あれは一体何だったんだろ？」

少年が目覚めてみると、そこは見慣れた部屋だった。くすんだ木目調の天井に、飴色になった板敷きの床。すべて見覚えがある。ここは確かに、少年がアルカディアで所有する『部屋』だった。

VRMMORPGアルカディア。この国産オンラインゲームは現在日本だけでなく、世界中で人気のゲームだ。そのプレイヤー人口たるや数億人。特に日本の若者社会では、やってない方が少数派だという話まである。

少年もまたその多数派の一人だった。むしろ、少年のプレイヤーネームであるカイルはアルカディアの中でも有名なほどだ。数少ない魔法職のカンストキャラとして。

アルカディアはキャラの成長にレベル制とスキル制を採用していた。レベルアップをすると能力値が上がり、ポイントがもらえる。そのポイントを所持しているスキルに割り振ることで技能を手に入れるというシステムだ。

加えて、職業という概念がアルカディアにはあった。基本職が八種類、上級職が十六種類、最上級職が三十二種類の合計五十六種類だ。これらはいずれもキャラの能力値や所持できるスキルに関わっていて、職によって成長速度も異なっている。

その中でも基本職魔法使いから派生していく魔法職は成長が極端に遅かった。しかも、その能力値はソロプレイなどほぼ無理というもの。攻略サイトに『廃人仕様』とか載せられるほどだった。

カイルは極端な廃人という訳ではない。その彼がレベルを上限の五百に到達させることができたのはいくつかの事柄に恵まれていたからであった。

まず一つはもつとも死亡しやすい序盤に偶然、レア防具を手に入るることができたこと。そして二つ目はいつでもパーティーを組めるヘビープレイヤーの友人ができたこと。これらの理由で彼はつい先日、カンストを成し遂げたのだ。

「仕方ない、GMに連絡だけして出掛けるかな」

カイルはさきほどの光景にショックを受けたのか少し疲れたような顔を見ると、ウィンドウを開こうとした。指を突き出してオープン、とキーワードを告げる。

だが現れるはずのウィンドウは出なかった。反応が悪いのかと思いきやカイルはもう一度、さきほどよりも一回り大きな声でキーワードを言う。しかしそれでもウィンドウが出ることはなかった。

「ウィンドウまで壊れてるのか……。これじゃフレンドも呼べないし……。面倒だけど役所に行くしかないなあ」

カイルは眉を寄せると、役所の場所を思ってたため息をついた。GMの常駐している役所は、彼の部屋と市街地を挟んでちょうど街の反対側に存在する。その距離を移動する手間を考えると、なかなかには彼は気が重かった。

しかし、いかないわけにもいかなかった。あまりにも薄気味悪いことであつたし、嫌な予感がしたのだ。彼はどことなく重い足取り

で部屋の端に向かうと、荷物を出すためアイテムボックスに手をかけた。

「はあ……ぬいぐるみ!？」

カイルは思わず素っ頓狂な叫びを上げて、後ろに尻餅をついてしまった。アイテムボックスには何故か、ぬいぐるみがぎっしりと収納されていた。きちんと並べられて、それぞれにリボンまで付けられている。赤、青、黄色と色鮮やかでなんとも少女趣味だ。

慌ててカイルはアイテムボックスを閉じると、その外観をチェックした。良く見てみると角張っていたはずの箱が角がとれて丸っこくなっている。さらに鍵の部分の形状もより古めかしいものへと変化していた。

「おかしいな? どうなってるんだ?」

「おい、お前! 人の部屋で何をやっている!」

鋭く響きわたる鋼のような高い声。驚いたカイルが後ろに振り向くと、仁王立ちをした若い女がいた。燃え立つような赤髪をそばだたせて、顔を真っ赤に染め上げながら……。

プロローグ（後書き）

序盤のうちはほとんど加筆修正のみです。話が変わってくるのはもう少し後になります。

第一話 来訪、異世界

カイルは一瞬、石化したように女を見た。その時、彼はポカンと目を見開き完全にあきれ顔になっていた。少々、滑稽なまでに。

「マイルームには他人は入れないはずだ。しかも「人の部屋」だと？ まったく不思議な話だなあ。」

カイルはいささか不機嫌になった。彼は濃いめの眉をへの字に曲げると、女に皮肉めいた視線を投げる。気弱な彼には珍しい、はつきりとした嫌悪感の発露だ。

「人の部屋も何も、ここは僕のマイルームだ。おかしいことは言わないでくれ」

「おかしいのはそっちだろ！ 私の部屋に勝手に侵入しておいて、あまつさえ自分の部屋だとは。ずうずうしいにもほどがある！ ……しかも、私の秘密コレクションまで見たようだしな……。まったく許せん！ 覚悟しろ！」

頭に血が上ったのか、真っ赤な顔をした女はいきなりカイルに向かって手を伸ばしてきた。カイルはそれを横に跳んで回避する。手は宙を切って、女は顔を歪める。そのあと女は次々と手を出してくるが、カイルにかすりもしなかった。

「いきなりはないだろ！ 僕の話も聞いてくれよ！」

「ちっ、素早い奴だな！」

「無視か！」

女は手を広げるとカイルに向かって飛び込む。鎧で着膨れた身体が、一気にカイルとの距離を詰めた。重厚な全身鎧で身を固めているにも関わらず、風を切るその身体は信じられない速さだ。

カイルは足に力を入れ、一気に跳び上がった。彼の小柄な身体は軽やかに浮かび上がり、天井を髪がこする。女はそれを見上げて驚いた顔をしたが、鎧で重くなった身体は止まらなかった。

「ぐはっ！ おのれえ！」

壁に身体を打ち付けて、聞き苦しい呻きを上げる女。その目はいっそう怒りで燃え上がり、なにかのオーラまでも感じられそうなどだ。そのただならぬ気配に、カイルは素早く呪文を紡ぐ。

「我が身に満ちる魔力よ、敵を戒めよ！ バインド！」

「なにつ、書もなしに魔法だと！」

星型と円形を合わせた魔法陣が床に現れる。そこから、白い光が弾けるように女へと跳んだ。女は驚愕で顔をゆがめるが、一瞬で魔力の網に掬め捕られる。まさになすすべもなかった。彼女は必死にもがくものの、頑強な光の網はよりきつく彼女を縛り上げるばかり。緩むことすらない。

バインドは詠唱こそ短いが、消費MPの多い高威力呪文だ。その威力は魔法職を極めたカイルが使用すると、上級ダンジョンのボスモンスターを数十秒も拘束できるほどである。女がカンストプレイヤーだとしてもしばらくは持つはずだった。

カイルは動けなくなった女にゆっくりと近づいていく。彼は女の蒼く透けるような瞳をよくよく見つめた。そしてふつとやつれたような息をついた。

「ねえ、どうして君は僕の部屋に侵入したのさ」

「だ・か・ら私の部屋なのだ！ それと君はやめろ。私はメリナ、だからメリナさんと呼べ！」

「ふう、わかったよ。だったらメリナさん、どうやってこの部屋に入ったの？」

「わかってないではないか！ …… もう一回家の外から確かめてみると良い。私の名前が書かれた表札があるからな、さすがにそれを見たら自分の部屋だとは言えないだろう」

「しょうがないなあ……」

カイルの返事は実に気のないものだった。彼はそのまま、かなり面倒臭そうに部屋のドアへと歩いていく。メリナはそれを半ば血走ったような目で睨んでいた。

アルカディアにおいて、指定した場所と違う場所にログインしたという事故をカイルは聞いたことがなかった。彼の百人単位でいるフレンドからだけでなく、そういったバグをネタにしているような攻略サイトや掲示板でもある。百パーセントないと言い切れないが、事故が起きるのは宝くじ並に低い可能性と言えた。

だからだろう、カイルはぞんざいにドアを開けて外に出た。しか

しこの瞬間、彼は雷が降ってきたような衝撃を受けた。

「えっ……！？」

彼の目に、栄えた街の様子が飛び込む。人であふれた広い石畳の通り。軒を連ねる無数の露店。人々が無数に通り過ぎていき、商人が威勢良く叫んでいる。建物はどれも趣のある煉瓦づくりで、時代の先端の香りがした。近代前の、されど中世や近世は少し通り過ぎたぐらいの街といった雰囲気か。

彼のいた部屋はその通りに面した建物の二階部分にあった。一階部分はなにかの店になっていて、そこから彼の今いる外に張り出したスペースへと階段が伸びている。これはありえないことだった。

カイルが持っているマイルームは裏通りに面した建物の一階にあるはずだった。間違ってもこんな賑やかな場所にはない。ゲームの中でも表通り沿いは物件が高いため、買うときにまだレベルの低かったカイルは裏通りの物件を買ったのだ。自分でじっくりと部屋を選んだため、そのことは鮮明に覚えている。

目の前の光景を拒否するように、カイルはドアをピシャリと閉めた。彼はそのまま、張り付いたような無表情でメリナに向かっていく。その焦ったような様子を見たメリナは得意げな顔をした。俗に言うドヤ顔というやつだ。

「やっぱり私の部屋だったろう？ わかったら早くこの魔法を解除して帰ってくれ」

「……ここはどこなんだ？」

「ふえ？」

「ここはどこなんだって聞いてるんだ！」

有無を言わせぬ迫力があつた。目には静かに燃える炎が見える。圧倒的な鬼のような迫力にメリナは押されてしまい、どもりながら現住所をカイルに教えた。

「ええつと、シフィアの南三番通りだ」

「シフィアってどこにあるんだ？ できれば大陸の名前から教えて欲しい」

「変なことを聞くやつだな。ロランシア大陸のラース王国に決まってるだろう」

何が起こったのか。カイルは頭を抱えてしまう。まったく地名に聞き覚えがなかった。彼のいたのはガルシア大陸で、ロランシアなんて名前では断じてない。カイル本人も気づかないうちに、大陸間移動なんて物をしてしまったのだろうか。

だが、そもそもアルカディアにロランシアなんて地名自体がなかった。カイルはもしかしたら未実装のサーバーの中に迷い込んでしまったのかもしれない。彼はそう考えて頭を痛くしながらもメリナにより詳しい話を聞き出そうとする。

「メリナさん、ガルシア大陸とかつて聞いたことない？」

「ガルシア……待ってくれ。どこかで聞いたぞ」

メリナは不自由な身体を器用に捻って考え始める。カイルの胸にわずかに希望が盛り返してきた。彼はメリナが思い出すのを今か今かと待った。すると――

「……思い出したぞ！ ギルドでミースから聞いたんだった。確か旧文明時代にはこの大陸がガルシアと呼ばれてたって言うてたぞ」

「……それって何年ぐらい前？」

「えっと、伝説によると旧世界が滅びたのは一万二千年前から……。だいたいそれぐらい前のはずだな」

――カイルの中で神が死んだ。

第一話 来訪、異世界（後書き）

具体的な時代設定を加筆しました。

数百年単位の未来だと勘違いをされてた方もいらしたようなので、そのためです。数百年だと他の方の二番煎じになってしまいますからね……。

第二話 嘘、それはつかれたもの

カイルの頭はからっぽになった。考える力を失ってしまったように、真っ白になって何も出てこない。心は身体から抜けて宙を漂っていく。それは屋根を通り抜けて青空を高く高く上っていった。

だがとりあえず、カイルはメリナに部屋にいた事情を説明するのにした。むろん本当のことは言わない。口から出まかせの嘘ばかりである。彼はにわかにつぎひいた頭を、必死になって回そうとした。

意外なことに、嘘はすらすらと出てきた。人間、追い詰められるとなんでもできるものであるらしい。ただたどしくはあつたが、カイルはもっともらしい嘘をメリナの前に並び立てることに成功した。

「……となるとこういうことか？ お前は辺境に住んでいる魔法使いで、自分の部屋に魔法で帰ったつもりがなにかの事故で私の部屋についた。それでたまたま、私の部屋がお前の部屋に良く似ていたから勘違いをしてしまったと……」

「そういうことだね。本当にごめんなさい！」

カイルは悲痛な表情で深く頭を下げた。腰の角度はちょうど三十度ほど、謝罪には理想的な角度でだ。それを見たメリナの表情はほんのわずかにだが、険しさが抜ける。彼女の怒りはほんの少しだけだが和らいだようだ。

「まったくんだはやとちりだな、いい迷惑だ！ しかし、それだ

とお前は書もなしに魔法が使えることになるな。どういうことだ？」

「……ええつとあの、書ってなんですか？」

カイルは心底困った顔をした。アルカディアには「書」と呼ばれるようなアイテムはない。この世界特有なもののようなのだ。そうなるカイルはおとなく白旗を上げて、メリナから話を聞くしかないのだ。下手に知ったかぶりをするとろくなことに合わないことぐらい、カイルは知っている。

メリナは原始人でも見るような顔をした。田舎者ではなく、原始人である。そのあまりの顔にカイルはいろいろと思っただが、開きそうになる口を堪えてぐつとつぐんだ。

「どれだけ田舎に住んでいたんだ？ 山奥の仙人だって知ってるよ。うなことだぞ。いいか、書というのは……。ああ、今から説明するからこの網をなんとかしてくれ。話しにくくてたまらん」

「ああ、ごめんなさい！ 忘れてたよ！ 魔力よ、その源たる世界へ還れ、デイスぺル！」

「おつとつと！」

魔力の網は淡く光る粒となって宙に消えていった。急につっかえのとれた格好となったメリナは、その場でよたついてしまう。その少し間の抜けた様子にカイルは口元を歪め、ぷすつと小さく息を漏らす。

「こら、笑うな！」

「ごめんごめん、笑わないよ」

「……まあ、今は特別によしとしてやろう。私は心の広い大人なんだからな。それより書についてだったか。これはみんな書と呼ぶが、正式には魔導書というものだ。人間が高度な魔法を使うのを補助してくれるアイテムだよ。旧文明からの遺物で、これがないと人間はほとんど魔法を使えないはずなのだが……」

メリナは疑わしげな視線をカイルにぶつけた。カイルはとっさに何か良い考えはないかと頭を捻る。だが、さきほどとは違って妙案は浮かばない。カイルの限界を、とうに越えてしまっていたようだ。

「うつ……ぼつ、僕はすぐ遠い所から来たんだ。この大陸の外にある場所からね。そこでは書がなくても魔法が使えたんだよ。だから僕は人間だけど書なしでも魔法が使える……」

「……だめだ、いくらなんでも苦し過ぎる……！」　カイルは嘘がばれるのを覚悟した。薄く口を開けて、いつでも呪文を唱えられるように備える。ばれたらすぐにメリナを拘束して、ここから逃げ出すつもりだった。

しかし、メリナはカイルの考えたような反応はしなかった。彼女は考え込むような顔をしてゆっくり部屋の奥へと移動していく。そしてそこにあつた椅子に深く腰掛けると、まっすぐにカイルの瞳を見つめた。その目は見透かすようで、さながら氷。濡れた刃のようだった。

何かを試されているようだ、とカイルは感じた。彼はとっさにメリナの蒼い瞳に向かって視線を返す。痺れ、なおかつ固まる空気。二人はにわかに見つめ合つて、カイルの中で緊張感が高まっていっ

た。

その見つめ合いは何十秒か続いて、部屋の中の空気は引き締まっていた。カイルはメリナの見透かすような瞳に汗をかきつつも、負けじと彼女の瞳を見続ける。すると不意に、メリナがぼつぽつと口を開いた。

「……悪い者ではなさそうだ。嘘っぱいが信じてみることにしよう。現に魔法も使えていたしな」

「信じてくれるのか？」

「ああ、まだ一応といった程度だが」

「ありがとう。それじゃ失礼するよ」

カイルはローブをひるがえすと、素早くメリナの部屋の入口へと移動しようとした。怒られるのはいやだし、警察みたいな連中を呼ばれたりしたらとても困る。最悪お尋ね者になりかねない。ひとまずここは逃げるしかなかった。しかし、そんなカイルに向かって後ろから、優しい声がかけられた。

「おい、待つんだ。えつと、カイルだったか？ お前ここで生活する当てはあるのか、ほとんど身一つだろう？」

「えつ、ああつとないです」

突然のことにカイルは馬鹿正直に本当のことを言ってしまった。するとメリナはあきれた顔をして彼に近づいていく。だが、その表情に先ほどもまでのとげはなかった。彼女はそのままカイルの肩に手

をかけると大きなため息をつく。

「当てもないのに飛び出すのか？ まったく、おまえ馬鹿だろう？
野垂れ死にするぞ」

「じゃあでもどうしたらいいのさ。戻れない以上この街に飛び出す
しかないだろ」

「……泊まってけ。明日家の前に死体が転がってたりしたらいやだ
からな。もちろん、出世払いでたんまり家賃は払ってもらうぞ！」

「あ……ありがとう！」

カイルは興奮した様子でメリナの手を握った。彼はありがとうと
壊れたレコードのように何度も何度も叫びながら、握った手を振る。
その顔はきらきらとしていてまったくもっていい笑顔だった。メリ
ナはその笑顔に少し照れくさそうに顔を赤くして、カイルから視線
を逸らせる。そして小声でそっとつぶやいた。

「……この部屋の隣に物置部屋がある。物をどかしたら最低限の生
活ぐらいはできるだろう。今日のところはそこへ泊まれ」

「わかった、そうさせてもらうよ！」

「勘違いするな。私はカイルがもし野垂れ死にしたりしたらわ・た・
しの寝覚めが悪いから面倒をみるだけだ。そのところを履き違え
るなよ！」

- -その後、カイルはメリナの案内で隣の部屋へと移動した。部屋
の中は「物置」とメリナが言っていただけあって、大量の物が散乱

して足の踏み場もない。しかし、部屋自体は物置として造られたものではないらしく、日当たりの良い住み心地の良さそうな部屋だった。特に年季の入った木の風合いがなんとも良い感じた。

こうしてうまく生活拠点を得たカイルは、熱心に部屋の片付けをした。そうしていつのまにか夕方になり、カイルはメリナと食卓を囲む。地球と変わらぬ温かなスープや魚が湯気を立てて、香ばしいハーブの香りがカイルの鼻腔をほどよく刺激した。腹が減っていたカイルは、その美味そうな食事に思わずがつく。

「うまいー！ これ全部メリナさんが作ったの？」

「それ以外に誰が作るんだ。私が作ったに決まってるだろう」

「へえ……」

フォーク片手に、カイルは心底意外そうな顔をした。彼の目はきれいな真ん丸になっている。そのあまりの驚きっぷりにメリナは頬を膨らませた。

「なんだ、私が料理できたら悪いのか!？」

「……そんなことはな、ないよ」

「だったらそんな顔するな! ……それはよしとして明日からのことを話そう。明日、私はカイルと自分の所属するギルドへ行ってみたいと思う。そこでカイルのギルドへの入団手続きをするんだ。ギルドで依頼を受ければ金を稼げるからな。ああ、ギルドってわかるか？」

アルカディアにおいて、ギルドという施設は欠かすことのできない施設であった。モンスター討伐を中心に、クエストと呼ばれる依頼を斡旋しているそこはプレイヤーにとってなくてはならない施設だったのだ。もちろん、カイルもこの施設の世話になっている。なのでカイルの答えは当然イエスだ。

「知っているよ。クエストを受けるところだよね？」

「ああそうだ。そういうところはカイルのいた土地と変わらないのだな。よし、そうと決まれば明日は早いぞ。さっさと眠るとしよう」

「はい、わかったよ」

その後まもなく、カイルは部屋に戻って床についた。明日への不安、少年特有の未知への期待感。その二つが入り混じった複雑な感情を抱きながら、カイルは夢へと誘われた――

第二話 噓、それはつかれたもの（後書き）

まだ不完全ではありますが、ここから先の展開のプロットができました！

ですので、ゆったり更新になることはあっても続けていく目処はなんとか。

完結までまだまだかなり時間がかかるでしょうが、これからもよろしくお願いします。

第三話 夢幻の少女

白。世界はそれ一色だった。塗り潰されたような、のっぺりと均質な空間が広大無辺に続く。光り輝くような白はどこか圧迫感にあふれていて、世界を押し潰しているようだった。その様はあたかも、白だけがすべてで他はないと言わぬばかりである。

カイルは気づいたらそんな世界にいた。紅い世界とは違い、おどろおどろしい光景ではない。しかし彼は何か得体の知れぬものを感じていた。心が凍えるような、いやなものを。

「今度は白か……？　なんでいつもこう……」

独り言をつぶやきながら、カイルはゆっくりと歩く。カツカツと硬質な音が響き、方向さえも満足にわからない世界を彼は進んでいく。するとその前方にふと淡い光が灯った。

光は暖かな気配に満ちていた。それはだんだんと膨らみ、拳大だったのがやがてカイルと変わらないぐらいの大きさとなる。大きく膨らんだ光はやがて人型に変化していった。

光はついに少女となる。水晶のような透き通る蒼髪と、新雪のような肌を持つ少女だ。彼女はカイルの方をみると、華奢な首をこくりと曲げる。

「きつ、君は一体……！？」

「……私は何者かは言えない。それはあなたが自ら知るべきこと。ただ一つ言えることは、私はあなたの味方……」

「じゃっ、じゃあここはどこなの？ 君なら知ってるだろう！」

「ここはあなたの無意識下にある世界。夢の世界よりさらに深い真つさらな世界よ。今回はあなたと話がしたくて私が呼んだの……」

「呼んだ？」

カイルは訝しむような顔になった。少女の水晶のような瞳が細まり悲しみを湛える。その顔はさながら消える雪のようにはかなく、もの寂しい。その悲痛な表情に、カイルは深い事情があることを悟った。

「……どんな話があるの？」

「あなたに伝えたいことは一つ。きたるべき時がきたらアルガイネに来て欲しい。裁きの時は近い」

「裁きの時？」

それはカイルにとっては耳慣れない、怪しげな単語だった。どこぞの新興宗教よろしく、最後の審判だとかアルマゲドンだとか、この少女は言うのであろうか。カイルはとっさにそう考えると、眉をひそめる。

しかし少女の顔はどこまでも真剣だった。そこには嘘の入り込む隙など、一切ないようである。『裁きの時』とやらが真実なのかどうかカイルにはわからないが、少女自身はそれを信じているようだ。

「咎人がまもなく蘇る。やはり人類は楽園からの逃亡者、もしくは

カインの末裔にしか過ぎなかった……。原罪たる咎人がいま再び現れ、今度こそ世界は原初の混沌へと還されてしまう……」

はたして、この少女は何者なのだろうか。一見して十代後半程度にしか見えない彼女の声からは、途方もない重みを感じられた。幾千、幾万もの時を重ねた大地のような、はたまた無限に広がる空のような。とにかくカイルにとって想像すら及ばないような声だった。

しかし、その声は突き放すような厳しさというものを持ち合わせていなかった。そのためカイルは何とか鉛のような口を開き、少女に尋ねる。

「それは一体……どうということなのさ。世界が原初の混沌に還るって……」

「全てが終わってしまうということよ。……それを防ぐには最後の始祖であるあなたの力が……いけない、あなたを誰かが起こそうとしている……！」

「ちょ、ちよつと！」

少女の姿が透けていき、空間に溶け始めてしまった。カイルは焦って手を伸ばすものの、少女の姿は捕らえられない。ふわりふわりと手は宙を薙ぎ、少女は霞む。そして次の瞬間、カイルの意識は急速に浮上していった――

「……起きろ！ 起きないか！」

「……ふわああ。あれ、女の子は？」

「何を寝ぼけておるのだから。ほら、さっさとギルドへ行くぞ。お前が寝過ぎたせいで遅刻寸前だ！」

怒りで爆発したメリナの表情を見て、カイルは昨日のことを思い出した。昨日、カイルはメリナが登録しているギルドという施設に出かける約束をしたのだ。それも早朝から出かけるという約束をだ。

「ああっ、ごめん！ いますぐ準備するからちよつと待ってて！」

「まったく、できるだけ早くするんだぞ！」

メリナは足を踏み鳴らして部屋から出ていった。カイルは彼女がいなくなったことを確認すると、すばやく着替えを始める。彼は飛ぶような勢いで服を取り替えていつて、みるみるうちにローブ姿へと着替えを終えた。本来はウインドウを使って一発なのだが、今はこうするしかなかった。

「お待たせ！」

「よし、さっそく行くぞ！」

カイルとメリナは家を飛び出すと、階段を転がるような勢いで降った。彼らはそのまま通りに突入すると、朝の街を疾走していく。途中で家の下の店から声がかかったが、彼らはそれをひとまず聞かなかったことにした。

カイルがかなり寝過ごしたが、実際にはまだ早朝といって良い時間だった。太陽は昇ったばかりで、まだ朝焼けが続いている。それなのに紅く照らされた街は人でいっぱいだった。通りは多数の通行人で占領されている。その中を二人は人波を突き破るように激走していった。

通行人の中には普通の人間ではない者たちまでいた。耳が伸びたもの、しっぽが生えたもの、はたまた人の姿をした動物というような者までバリエーションは実に豊富だ。カイルはその姿をじっくりと観察したいと思ったが、ここは我慢だと走り続けた。

そうして走っていると、いきなり視界が開けた。通りの両端にあった高い建物がなくなり、広場のようになっていた。かなり広い広場で、中心には丸っこいモニュメントのような物まで置かれていた。

カイルはその広場の先に見えた建物を見て、思わず目を疑った。およそカイルのイメージしていたギルドの建物ではなかったのだ。だがメリナはその建物の門の前で足を止め、息をつく。

「ふう、ついたぞ。何とか他の連中より早く来れたな」

「あの……本当にここなの？」

「ああ、間違いなくここが魔法ギルド『青の旅団』の本部だぞ。何かおかしいか？」

「いや、だってこの建物はどう見ても……」

どっしりと視界を占める重厚なたたずまい。さながら山を削ってきたようなその建物からは、三つの尖塔が伸びて天をつく。さら

にその建物の周りを、歴史を感じさせる強固な壁が幾重にも取り囲んでいた。厚いところでは数メートルはあろうかという、それはそれは頑強な壁がだ。

カイルが目にした建物。それはどうみても、古びた城のようにしか見えなかった - -

第三話 夢幻の少女（後書き）

少女のセリフが難解なのは仕様です。雰囲気を出したかったので。

……でも、意味不明過ぎるという意見が多数ありましたら何か考えます。

第四話 ギルドでの驚愕

高く広がる吹き抜けの大空間。古びて白ちゃけた石のアーチが天井を形作り、そこから豪華なシャンデリアが下ろされている。その縦長の大広間の奥では意匠をこらしたステンドグラスが、七色のパステルカラーの光を投げかけていた。

ステンドグラスのすぐ下から下がっている巨大な垂れ幕。滑らかで艶のある、青いビロードのような素材のそれには少々変わった紋章が描かれていた。六芒星型の魔法陣の中に、本が置かれているというデザインだ。その本の題名にあたる部分には『青の旅団』と記されている。

「ここがギルド……中もやっぱりなんかイメージと違うなあ」

「そうなのか？ この大陸にある大手のギルドはだいたいこんな雰囲気だぞ。カイルのいたところではやっぱり違うのか？」

「僕の故郷だと酒場みたいなところが多いかな」

カイルは遠くを見るような顔をしてそういった。彼にとって、アルカディアの中でもギルドは特に思い出の多い場所だ。お金稼ぎや素材稼ぎなどで、その存在は欠かすことができないのである。そのためたくさんあるギルドに関する思い出を、彼は思い出していた。

メリナはカイルの話を聞いて、ふうむと首を捻った。彼女にとって酒場風のギルドというものは、いまいちイメージにくいようだ。この大陸では城までとはいかなくとも、各ギルドは専用の屋敷などを保有していることがほとんどなのである。

「それはまた……。大昔はこの大陸のギルドもそうだったらしいが、今はそんなとこ見たこともないな。……ってゆっくり話をしている場合ではないか。ほら、受付に行くぞ。さっさと登録しなければ」

「ああつ、はいはい」

メリナはカイルを連れて広間の奥へと移動した。すると広間の端に、受付カウンターのような場所が見えてくる。光沢のある木製のカウンターが壁から飛び出して、その周りにはコルクボードが張られていた。その近くにはいくつか椅子が並べられていて、そこだけ雰囲気がわずかに違う。

そのカウンターの脇には背の低い、華奢な少女が座っていた。彼女はふんわりした碧の髪を揺らして、こちらに振り向いてくる。朝だから眠いのか、その小さく整った顔は憂鬱そうだ。

「おはよう……。早いわね。でも残念、星クラスのクエストはないわ」
「違う違う、今日は私が依頼を受けに来たんじゃないんだ。こっちの男を登録して欲しくてな。保証人には私になるから、すぐ登録してやってくれ」

「わかったわ。だけどその前に、その子とあなたはどんな関係なの？　もしかして春でも来たの？」

少女はからかうように言った。その紅い瞳はニヤニヤと笑っていて、悪戯っ子のよう。顔からは眠気が消えていて、すっかり目が覚めたようだった。

その一方で、カイルは頬を赤らめた。彼は恥ずかしそうにしながらも、少女の発言を否定するべく声を上げようとする。しかしその時、予想外の言葉をメリナが放った。

「春が来た？　こんな時期なのだ、来ていて当然だ。というよりも夏だろうに」

少女とカイルが固まった。二人の心を極地のような冷たい風が吹き抜けていく。だが、少女の方はすぐに気を取り直すことに成功した。

「……相変わらずの脳筋。メリナに期待した私がいけなかったわ。……それはそうとしてそのあなた、名前は？」

「カイル、カイルって呼び捨てで良い」

「じゃあカイル、こっち来て」

少女はカイルをカウンターの前の椅子に座らせた。彼女自身はその向かい側に座り、カウンターの中をがさごと漁る。そして少ししてから、少女は十枚ほどの書類を取り出してカウンターの上に置いた。

「まず登録作業をする前にはじめまして、私はミースよ。このギルドに所属する魔導士で事務方を仕切らせてもらってるわ」

「よろしくお願いします」

「こちらこそ。えっと最初は住所、氏名、年齢の確認からね。名前は聞いたから住所と年齢だけ言って」

「住所はメリナさんの家で居候。歳は今年で十五だよ」

「そう、じゃあ住所はメリナと同じで歳は十五なのね。わかったわ、書類に記載しておく。ちよっとまって」

ミースは万年筆のような筆記具を取り出すと、書類に次々と記入していった。その作業は流れるようで、手慣れたもの。事務方を仕切っているだけのことはあった。

彼女はこうして手早く書類の記入を終えると、今度は下から大きな水晶球を出してきた。明らかにその小さな手にはあまる大きさのそれを、彼女は抱えるようにして持ち上げる。そして水晶球が置かれた瞬間、地震のような揺れがカウンターの上を襲った。

「ふう……保証人がいるから、次はあなたの能力測定よ。この水晶に手を置いて。それでだいたいわかるわ」

「オツケー、わかった」

カイルは軽い調子で水晶に手を置いた。すると水晶がにわかに震えて、その中で激しい火花が散る。そのただならぬ様子に、カイルは慌てて手を離れた。しかし水晶はボンと音を響かせると、吹き飛んでしまう。

ミースの顔がにわかに険しくなった。彼女はそのまま額に手を当てて天を仰ぐと、メリナの顔を凍えるような瞳で睨む。その表情たるや、まさに鬼だ。

「メリナ、どういうこと？」

「いや、カイルとはまだ知り合ったばかりなんだ。私にもよくわからん」

「それってどういうことなの？ あなたの居候でしょう？」

「実はその、なんだ……」

メリナはミースに近づき、彼女の肩を掴んだ。そのまま二人はカウターの陰に移動すると何やらひそひそと話を始める。カイルのいた場所からは二人の姿はほとんど見えなかった。だが時折、ミースの呆れたような声のはつきりと聞こえてくる。

しばらくして、メリナとミースはカイルの前に戻ってきた。二人とも眉間に皺を寄せて、苦い表情をしている。彼女たちはカイルの方を見ると濡れた刃のような視線を送った。その眼差しは稲妻のよう。カイルの心を貫く。カイルは少し、冷や汗をかいた。

「……カイル、お前は故郷で何をしてたんだ？ 能力測定の水晶体が吹き飛ばなんて普通はありえないが」

「……モンスター討伐をして暮らしてたんだよ。だからきつとレベルが上がってるんだと思う」

「レベルか……。だがそれだとかかしいな。魔導書と契約しなければ、そもそも人はレベルアップしたりしないぞ」

「えっ、そうなのか？」

「ああ、この大陸だと常識だぞ」

冷える空気、静止する世界。二人の間を限りなく気まずい空気が漂った。たちまちのうちにそれはあたりを覆いつくして、世界は動きを止めていく。その中ではわずかな空気の揺らぎすら、途方もない大風のように感じられた。時間も引き延ばされて、カイルは冷や汗が滴り落ちるまでの時間を、永遠のように思う。

だがその時、ミースが二人の間に割り込んできた。彼女は二人を見回すと、呆れたような顔をする。そしてゆっくりと話を始めた。

「とりあえず落ち着くべき。揉めても事実是不変わらないわ。まず、カイルを詳しく調べることから始めるわよ。最新型の万能型測定水晶を出してくるから、ちよっと待ってて」

ミースはそういうと、カウンターの後ろの扉からどこかへ出ていった。そしてしばらくすると、その扉の向こうから床が叫んでいるようなキイキイという音が響いてくる。それはまるで、巨人の足音のようだった。

「扉を開けて！ 一人じゃ無理なの！」

「待ってろ、今行くぞ。……うおお！ なんだこれは。よくここまで運んで来たな！」

「感心したなら運ぶの手伝って……！」

ミースが持っていたのは恐ろしく巨大な水晶だった。その大きさとるや、彼女の上半身がすっぽりと覆われてしまうほどの。当然、重量も凄まじらしく水晶越しに歪んだ赤い顔が見える。足も震えていて、廊下の床に張られた木の板がしなっている。

メリナとカイルは大急ぎでミースに駆け寄ると、水晶に手をかけた。ツルツと手に張り付くような感覚とともに、押し潰されるような圧力が二人の手にかかる。まったくもって、華奢な少女が一人で運んでいたとは信じがたい重さだ。

しかし、さすがはカスタキャラといったところか。カイルは二人と協力しながらとはいえそれをなんなく運んでいく。彼一人で持ってもまだ余裕があるくらいだ。魔法職でもやはり一般人よりは筋力があるらしい。

水晶はカウンターの脇の床にある窪みへと収められた。ピタリと嵌まったことから、この水晶のために用意されたものであるう。こうして水晶の準備が完了すると、ミースは息を切らしながらもカイルに説明を始める。

「はあはあ……。この水晶はレベルを測れることはもちろん種族などさまざまなことがわかるわ……。使い方は、水晶の真ん中にある手の平型の窪みに手を置くだけ。さ、やってみて……」

「よしっ……」

カイルは腕まくりをすると少し気合いを入れた。そして叩くかのように勢いよく水晶に手を置く。するとまた、さきほどの水晶と同じように中で火花が散った。目がチカチカとするような光が散発的に放射される。

だがやはり大きいだけあってこの水晶はさきほどの水晶とは違った。火花はやがて収まっていき、代わって無数の文字が現れる。それは筆記体のような文字でカイルには読めなかったが、ミースは次

々と流れていくそれを真剣に見つめていた。一言一句見逃すまいと、目を光らせながら。

文字が通り過ぎるたびに、ミースの顔付きは険しくなっていた。その大きな瞳は不安を表すかのように曇って、白く狭い額の皺はどんどんと深まる。さながらそれはよほど悪い夢でも見ているようで、はたから見ているカイルも不安に駆られてきた。

そうしていると、ようやく文字の川は流れを止めた。ミースは顔を上げて、カイルの方に目を向ける。彼女は何度も、しつこいほどに文字を写したメモと彼の顔を見比べた。そして半ば、愕然としたような驚きを持って口を開く。

「うっ、嘘。レベル五百、種族パターン……アンノウン。能力データまで異常だわ。これは一体……。もしかしてカイルは『ヒト』じゃないの……？」

第四話 ギルドでの驚愕（後書き）

今回は最強物でお決まりのイベントです。テンプレものとしてこれは外せませんからね。

もしご意見、ご感想がありましたら感想欄までどうぞ。

第五話 登るべきは塔（前書き）

今回から内容が変化します。

ですが、基本的な登場人物や大筋は変化しないのでご安心を。

第五話 登るべきは塔

驚愕を描く少女の赤い瞳。その純白の顔はほのかに青く染まり、息は荒れる。カイルはミースのただならぬ様子に思わず身を固めた。メルナも同様に、背筋を冷やす。

「どうしたんだよ。いったい何があったのさ」

「いえ、カイルのデータがあまりにも異常だったから……。ちょっと驚いただけよ」

「それで登録はできるの？」

「わたし一人では判断しかねるわ。マスターに相談しましょう。ついでにきて」

ミースはテクテクと近くの扉まで歩いて行くと、その前でおいでと手招きをした。カイルはそれに素直に応じて彼女の元へと歩み寄っていく。それにはメルナも続いた。だが、メルナが近づいていくとミースは彼女に向かって手のひらを突き出した。明らかに来るなという制止である。

「あなたはここに残って」

「どうして？ 私は一応カイルの保護者だぞ」

「あなたがいると話がややこしくなるかもしれないわ。それはカイルのためにはならない」

「むう……」

メリナは不満げに頬を膨らませてうなった。しかし、ミースは眉ひとつとして動かさない。人形のように、堅い表情をしたままだ。そのあまりの無表情ぶりに、メリナは仕方なく元の場所へと戻っていく。

そうしてメリナが元の通り椅子に座ったところで、ミースは確認するようにカイルのほうを見た。カイルはその視線に黙ってうなづく。するとミースは扉を開けて、廊下の奥へと歩いて行った。

廊下は古びていた。苔の生えた跡のようなものが見える石壁が、長い時代の流れを感じさせる。二人はその中を静かに歩いていた。会話もなく、響くのは足音のみ。それさえも、厚い飴色の床板に吸い取られて本当にかすかだ。

二、三分歩いただろうか。二人は階段を上り、二階へとやってきた。その時だった。カイルは前方を歩いていたミースの影を追い越して、彼女の隣に並ぶ。そして自分のほうを覗き込んできた彼女に、少し遠慮がちに口を開いた。

「……どうしてメリナさんを置いてきたのさ」

「彼女は根本的な部分で優しすぎるの。これからマスターと交渉するけど、そのとき彼女の優しさは邪魔になりかねないわ。結構ドライな話になりそうだったから」

「そっか……」

- - 人間きれいごとだけでは生きていけない。

カイルはとつさにそう思った。異常な能力を持っているらしいカイルを受け入れるのには、それ相応のリスクが伴う。おそらく、そういうことに対しての話し合いをこれからしに行くのだろう。

そういう場合、どうしても汚い話が出てくる。それをミースは、人がいいメリナには受け入れられないと思っているのだ。だからこそ彼女はメリナを置いてきたのであろう。

カイルがそうして少しばかり考えていると、二人はそこだけ周りと違う雰囲気の場合にきた。まわりが古びて少し埃をかぶったようなのに対して、そこだけは真新しい感じだ。壁はきれいに表面の石が張り替えられていて、床も赤絨毯が敷かれている。絨毯はふんわりと毛足が長く、高級感でいっぱいだ。

その一角にあった扉には、金文字でマスター執務室と刻まれている。ミースはその扉をコンコンと叩く。すると中から、意外なほど軽い調子の少女のものと思しき声が返ってきた。

「ふわああ……。朝もはようから誰や？」

「ミースよ。ちょっと相談したいことがあって」

「ちょっと待つてな……。準備できたで。ほな中に入り」

ミースは扉をあけると、中に吸い込まれていった。カイルも少し緊張気味に、若干角ばった動きで中へと入る。すると、彼の目の前に机によりかかった少女の姿があった。カイルは思わずびっくりしてその少女を凝視してしまう。

少女が格別美人だったからとかそういう理由ではない。まあ、丸っこい顔立ちと大きな蒼い瞳をしたかなりかわいらしい少女ではあったが。むしろ、カイルが注目したのはその少女の服装だった。

水玉模様をした桃色のパジャマに、先端に白いボンボンのようなものがついたナイトキャップ。それにあわてて羽織ったのか崩れてしまっている白いコート。さらにカイルが部屋の中を見渡すと、部屋の隅に掛け布団がめくれ上がっている天蓋付きのベッドまである。少女が今の今まで眠っていたのが丸わかりだ。

ミースはその情けない少女の様子に露骨に顔を曇らせた。彼女は細めの眉を吊り上げると、パジャマ姿の少女をあきれ果てたかのように見つめる。その迫力はまさに燃え上がる炎のよう。どこぞの自由業の人たちでも逃げだしそうなほどだ。

「またこんな時間まで寝てたの？　寝すぎだわ」

「う、うちはまだ若いんやからな。ほら、若い子はたくさん眠らなアカンやろ？　そ、それより何の用で来たんや？」

「実はここにいた男の子のことで話があつて……」

ミースは少女の近くに寄って行くと顔を近づけて話を始めた。そこそと、カイルから視線をそらすようにして二人は話をする。すると、話を聞いている少女の目がだんだんと見開かれていき、不穏な色を帯びていった。

話が終わるころには、少女はさきほどとは別人のようになっていた。服装などはまったく変化していないのに、威圧感などが比べ物にならないのだ。ここにきてようやく、カイルは少女がマスターと

呼ばれるに値する人物であることを悟る。メリナとは方向性が異なるが、まさに歴戦の猛者といった風格が今の少女にはあるのだ。

少女はカイルの方に目をやった。カイルはそれに視線を合わせる
と何も言わずに一步前へと出て、少女のいる豪華な執務机の前に立つ。すると少女は後ろの窓から差し込む陽光に目を細めながら、ゆっくりと話を始めた。

「あんたがカイルなんか？」

「ああ、そうだよ」

「うちはこのギルドのマスターをやつとるアリアや、よろしくな。
で、さつそく本題なんやけど……。うちとしては入れるのはかまへんよ。ただ一つ条件がある」

「条件？」

「そうや条件や」

アリアはいたずらっぽく笑った。ただしそれは子供のように無邪気というわけではなく、何か黒いものを内包しているようである。
カイルはとっさにその腹の内を探ろうと身構えたが、アリアはますます笑うばかり。完全に上をいかれていた。

「……どんな条件なんだ？」

「大したことやあらへん。うちのギルドには今ではなくなつてもう
たけど昔は入団テストがあつてな。それをこなしてほしいんや」

カイルが想像していたような条件ではなかった。てっきり彼はギルドに保障金を納めろだのそういった金銭にかかわるような条件だと思っていたのだ。そのため金を持っていないカイルは安心して少し拍子抜けしたような顔でアリアに聞き返す。

「それだけでいいの？」

「それだけでええよ。うちとしてはあんたが水準以上に仕事ができるってことを証明してほしいだけや」

「なるほど。ギルドにとって、あやしい人間を登録するリスク以上にリターンがあることを示してほしいと」

「賢いね。そういうことや」

「それで、その入団テストの内容は？」

「……この街の南にある蒼の塔を最上階まで登って、合格の証である宝石を持つてくることや」

アリアはそう静かに重々しく告げた。部屋の空気が静まって、その声はシンと染み入るように消えていく。それを聞きつけたミースの顔がたちまち血の気をなくして青ざめる。目は丸く見開かれて、唇は震え。彼女は焦ったように早足で二人の横へと移動してくると、強い口調でアリアに提言した。

「塔のモンスターはここ数年で増大した魔力の影響を受けて、非常に凶暴化しているわ。しかも最後に使ったときからくりが作動したとかで内部も難解な迷宮に変化しているのよ。ただでさえ死亡者が多発して取りやめになったのに、それ以上に危険なことをやらせ

るつもりなの！」

「そやかてなあ、カイルを入れるのにはリスクが伴うんや。本人が善良なええ奴やったとしてもこれだけ能力が高くなると厄介なことがありそうやからね。だからこれぐらいできんと、入れる側のギルドにはメリットがないんよ」

「それは確かにそうだけれど……。ちょっと限度を超えているわ」

ミースの言葉にアリアは少し考え込んだ。それだけ蒼の塔が危険であるということなのだろう。彼女はカイルの年の割に幼く見える顔をもう一度見ると腕を組み、頭を下げてウンウンとうなり始める。そのまま彼女は数分の間思考の海に埋没した。

そうしてしばらくたったとき、彼女の頭にふとひらめきがあった。彼女は頭をあげると明るい表情でカイルのほうに向きなおる。

「わかった、今回は特別や。カイル、仲間を何人が連れて行ってもいいで。ただし、仲間はギルドの人間にすること。それと仲間にするにあたって金とか物のやり取りをしないこと。この二つを守つてな。そうそう、黙つてても調べればわかるから、嘘はだめやで。ようはギルドで仲間を作るのもテストのうちってことや」

「わかった、その内容でいいよ」

「じゃ、期限は一週間や。精一杯頑張つてな。うちは応援しとるで！」

アリアは今度こそ、裏のない笑顔を見せた。大きな蒼い瞳が明るい透明な光に満ちて、彼女本来のかわいらしさが全面に現れる。蒼

い瞳と魅力的に膨らんだ桜色の唇が織りなすそれは、まさに咲き誇る大輪の花のような実にすばらしい笑顔だ。カイルはその笑顔に顔をほころばせながら部屋を退出していった。

こうしてカイルはギルドに入団すべく、蒼の塔の攻略に挑むこととなったのだった――。

第五話 登るべきは塔（後書き）

青の旅団の入団テストは実はふつうの魔導士にとっては相当な難関だったりします。イメージとしてはハンター試験よりは簡単な程度と想像してください。

第六話 燃える、心（前書き）

毎度のことながらサブタイのセンスと内容がいまいち合っていないです。うつつセンスがほしいよ……。

第六話 燃える、心

コツコツと足音を響かせながら、カイルはミースより一足先にメリナのいる大広間へと帰ってきた。するとすでに仕事を求める魔導士たちが集まっていて、結構な賑わいである。だがそんな中でもカイルはすぐにメリナを見つけ出すと、彼女の元へと近づいて行った。メリナの方もまたカイルに気がついて、椅子から立ち上がる。そのとき顔には平静を装っていても隠しきれない不安が浮かんでいた。

「カイル、なんて言われた？」

「入団テストとして蒼の塔に登ってくれて。それで、登れたら入団を認めてくれるみたいだよ」

「蒼の塔か……」

メリナは眉をゆがめた。彼女はそのまま腕を組むと、悩ましげな声を上げる。やはり蒼の塔は相当危険らしく、彼女も不安のようだった。そこでカイルは彼女を安心させるべく笑って言う。

「仲間をつれていっても大丈夫みたい。ただし、お金とか物で勧誘しちゃだめみたいけど」

「そうか、なら私がついていこう。ほかの仲間も私にまかせておけ。顔は広いんだ、なんとかしよう」

「ほんと？　ありがとう！」

「ま、これもそれ私のためなんだからな。お前が働かないと困る

のは私なんだぞ！　　なんたってひと月百万マールは家賃を払ってもらいたいからな」

「……どれくらいの金額かわからないんですけど、それって法外じゃないませんか？」

百万という響きに怖気づくカイル。彼の現実での小遣いはひと月三千元だ。とつさに小市民の彼は百万円あったらアルカディアでどれだけ課金アイテムが買えるのかと考えてしまう。……課金アイテムで換算するところが彼らしいが。

そんなちよつとおどおどした様子のカイルに、メリナは割合本気に近い目をしてさらに衝撃的なことを告げた。

「激安だぞ。なんたって私みたいな美‘少’女と住めるんだからな」

「少女？」

「なんだカイル、その不満そうな目は？」

「いや、だって。メリナさん美人は美人ですけど二十歳すぎてますよね？」

カイルにはメリナは二十代前半ぐらいに見えた。彼女には落ち着いているような雰囲気があったし、顔立ちも大人びている。体形も十代ではまずありえないくらいメリハリがきいていた。二十歳すぎているというのは別段悪い意味はなく、カイルがこういう事実をとらえた結果だった。

しかしメリナは違うようにとらえたらしい。彼女の白い顔は沸騰

したように紅く染まっていき、肩が震え始める。両手はこぶしを握りしめ、コキツと骨が鳴る音がした。

「……何を言うか、私はまだ十九だぞ！　まだ十代だアア！」

メリナが爆発した。その圧力さえ感じるほどの音量に、周りの人間がびくつとした様子で彼女の方に振り向く。だがそんな些細なことなど構うことなく、彼女はそのままカイルを鉄拳制裁すべく立ち上がる。その時、彼女の後頭部からカコーンと快音が響き渡った。そのままカイルの方に、少し凹んだ木のコースターが飛んでくる。

「イタっ！　誰だこんなもの飛ばしたのは？　許しておけんな！」

「ひいつ！　おっかねえ！」

「こええなあ、おい！」

メリナが憤怒の形相であたりを見回すと、周りの男たちは大げさな動作で縮みあがる。しかしその顔に浮かぶ下品な笑顔は少し彼女をからかっているようだ。メリナはますます顔を赤く燃え上がらせて、彼らのほうにずかずかと足を踏み鳴らしながら突進していく。だがそのとき、御留守になっていたカイルの方に黒いマントをまとった男が近づいた。彼はカイルの手元からすつとコースターを奪う。そのまま彼はそれを吟味するように見ると、ヒュウッと口笛を吹いた。

「すげえな、少しへこんでらあ。さすがはメリナ、半端じゃない石頭だぜ」

「あなたがコースターを投げたのか？」

「ああ、メリナの声があんまりうるさかったんでな。あんなに叫ばれたら耳が破けちまう」

「……確かにすごい声だった。だけど物を投げるのはないんじゃない？」

「いいんだよ、メリナの石頭はたとえ隕石がぶつかっても平気……ぬわっ！」

男の後ろに修羅がいた。彼女は紅い髪を天に立たせて、光線でも出せそうな剣幕で男を睨んでいる。男はその殺気をまともに感じてしまったのか、思わず前にのめってせき込んだ。

しかし、男はひょうひょうとした表情を崩さなかった。彼はそのままなんでもないかのように後ろに振り向く。そして殺気に燃えたぎるメリナの瞳を真正面から見つめた。

「コースターはお前が投げたんだな、ゲーツ？　しかも人にものをぶつけておいて石頭だから平気だって？」

「いや悪かった。つい、手が滑ってな。だがもともと、メリナが人の迷惑考えずにでかい声を張り上げたのが悪いんだぜ。あれにびつくりしなきゃ手なんか滑らなかった」

「外に出るかゲーツ。すこしお前と話し合いをしなければならんよっだ」

「そっだな、こっちもお前に言いたいことがたくさんある」

メリナとゲーツは連れだって外へと出て行こうとした。互いの目には炎が燃えて、その間で激しい火花が散っている。二人は歩くたびに相手の足を踏もうとまでしていた。カイルはそのただならぬ空気を察知して二人を止めようとするものの、それを振り切って二人は出て行ってしまう。そのためカイルもあわてて外へと歩き出そうとしたが、その肩を後ろから誰かにつかまれてしまった。

「下手に仲裁すると被害が増えるだけよ。ほかっておくのが一番」

「あつ、ミース。戻ってたの？」

「二人が喧嘩し始めるころには戻ってたわ。大丈夫、あの二人の喧嘩はしょっちゅうだから心配することない」

「はあ……。そんなんでいいの？ ギルドの仲間なんだろう」

「魔導士なんてたいていバトルジャンキー。ギルドで喧嘩なんてよくあるわ。仲間とのコミュニケーションは拳で、というのは普通」

「……いつから魔法職ってそんなに熱血になったのさ！ ありえないだろ！」

平然とした顔でいるミースに、カイルは心の中で突っ込みを入れた。たぶん、彼の人生の中でも一、二を争うぐらいの全力での突っ込みをだ。それくらい、カイルのイメージしている魔法使いと違ったのである。

アルカディアで魔法使いというのはクールなイメージの職業だった。少なくとも大多数のプレイヤーはそう考えていたし、運営もそうである。そのため登場する魔法使いのNPCはだいたいそういう

性格設定がなされている。間違っても拳で語り合うバトルジャンキ
ーなんてのはいなかった。

カイルは若干この世界の魔導士たちとうまくやっていけるのか不安になった。彼自身はゲームにはまっではいたが、そこまで戦闘が大好きという人種ではない。はつきりと言ってしまえば性格としては彼はおとなしい方である。そのため魔導士たちと話が合うのか気がかりとなったのだ。その不安は彼の顔にも表れて、少しばかり唇が紫になる。それをミースは見逃さなかった。

「なんか調子悪そうね。大丈夫？」

「大丈夫だよ。たいしたことじゃないから」

「そう、ならいいわ。それよりお茶でも飲まない？ 二人の喧嘩は長いわよ、それにあなた一人ではまともに勧誘なんてできやしないわ。メリナを待たないと」

「うーん、お茶はちよつと……。代わりに本とかないかな？ 時間もつぶせるし、知識も増やせていいと思うんだけど」

「魔法関係のわかりやすい入門書があったわ。ちよつとまってて、持ってきてあげる」

ミースはカウンターの奥にある棚をあさり始めた。彼女は髪に少し埃をつけながらも手を伸ばし、上の方までしっかりと本を捜す。そしてしばらくして、彼女は一冊の厚い黒表紙の本を小脇に抱えてきた。

「はい、これ。面白くておすすめよ」

「ん、ありがとう。……っ！」

本を受け取ったカイルはその表紙を見た途端、石化した。本を開かせまいとする鉄壁の防御力、いやむしろカイルの目に色覚攻撃を仕掛けてくるような攻撃力にあふれたタイトルがそこにはあった。

『燃えよ！ 超絶魔導塾！ 入門編』 ミルアーキ書房刊』

カイルの頭の中を、一瞬だが筋骨隆々のふんどし男が占領したのだった――。

第六話 燃える、心（後書き）

ミルアーキ書房はネタです。某有名架空出版社の名前の読み方をいろいろといじったのですが……わかる人、それなりにいるよね？

第七話 魔導書は神性能なり（前書き）

今回はおもに説明です。ご了承ください。

第七話 魔導書は神性能なり

「ふうっ……」

カイルは疲れたように一息つくと、手に持っていた本をテーブルの上に置いた。彼はそのまま大きく背を伸ばすと、しょぼしょぼする目を手で擦る。その顔はそれほど長い時間が経過したわけではないのに、疲労の色が色濃く見えた。

魔法の入門書「燃えよ！ 超絶魔導塾 ―入門編―」は意外なことにまともな本だった。説明がやたらハイテンションだったが、その内容自体はわかりやすく秀逸である。しかも劇画タッチなのがカイルは気になったが、この本には説明用のイラストも多用されている。おかげで彼はこの世界の魔導士について、およそのことを知ることができた。

この世界の魔導士の使う魔法というものはアルカディアの魔法とは大きく異なっていた。まず、彼らが魔法を使用する際に必ず使う魔導書というものが、カイルのイメージしたものとはまったく異なっていたのである。

カイルがイメージした魔導書というのは、ページを一枚ずつ消費して使う消費アイテムである。ページをちぎって投げることににより、そこにあらかじめ記録しておいた魔法を発動させることができるのだ。値段が恐ろしく高い上に制限付きだが、魔法職以外にも魔法が使えるとあってアルカディアでは割合ポピュラーなアイテムである。彼が魔導書と聞いてこれを連想したのはもっともな話だった。

しかし、この世界の魔導書というものはそれとは似ても似つかないものだった。書とは名ばかりでいわば、所有者専用仕様の魔法兵器とも言うべきものである。しかも古代文明の残した遺物らしく、すさまじくオーバーテクノロジーなものだ。具体的には所有者がそれぞれ起動キーワードを唱えることにより、古い本のような形から近未来的フォルムの戦闘形態へと移行する。

戦闘形態は近接武器タイプ、遠隔武器タイプ、特殊武器タイプの三種類だけである。だが、ひとつとして同じ姿を持つ魔導書はないらしい。この世界には一万冊近い数の魔導書があるそうだが、そのすべてが違う姿をしているのだ。さらに見た目だけでなく記録している魔法もそれぞれ違う。

しかも所有している人間と契約を結ぶことにより、魔導書は契約者に合わせて成長を始める。具体的には所有者が戦闘するたびに敵の魂の一部を取得して機能を拡充させ、さらに所有者に合わせて新たな魔法を生成したりするのだ。

この魔導書の成長は契約している人間にもフィードバックされる。そして、魔導書の成長具合をこの世界の人間はレベルで表す。つまり「この大陸の人間は魔導書と契約しないとレベルが上がらない」とメリナが言ったのはこういうことなのだ。カイルの言うレベルとはかなり異なっていたのである。

カイルは正直、この説明だけでも飲み込むのが大変だった。しかし彼にとって困ったことに。この世界の魔導書の機能はこれだけではなかったのである。まだ二つ「クレセリヲ・フレイム」と「Fゲージ・システム」と呼ばれる厄介なものがあつたのだ。

クレセリヲ・フレイムの方はまだ単純だった。魔導書が戦闘形態

に移行すると同時に、所有者を守るべく展開される強力な鎧のようなものである。これは純粋な魔力により構成されるもので、所有者の思考や体形に合わせて自動生成される。つまりは変身ヒーローのスーツのようなものだと考えればよいのだ。実際、この入門書にはイラスト付きでそれっぽい解説がなされている。

だがそれに比べて厄介だったのはFゲージ・システムだった。このシステムはレベル制VRMMOだったはずのアルカディアの世界観に、根本的に喧嘩を売っているようなシステムだったのである。
-。

本の説明曰く「Fゲージ・システム、これは魔導書の動力源たるミューオン・マナジェネレータと所有者の精神をリンクさせることにより、人間の精神状態を魔導書の出力に直結させるというシステムだッ！そしてこのシステムの状態を具体的に表示するのがFゲージなのである。このシステムにより、基本となるレベルの低いものでも精神力いかによって実力をはるかに超える力を発揮することが可能だ。つまり我々が真に力を求めるとき、魔導書もそれに応えてくれるのだアア！……ただし、精神力が低ければ実力以下のみしか発揮できない。また魔導書の方は理論上、無限に出力を上げられるがあまり上がりすぎると人間の体や精神の方が持たないので気をつけるべし」

これを読んだ時、カイルは言葉が出なかった。

魔導書の動力源がミューオン・マナジェネレータとかいうやたら

SFの響きがあるものだったとか、そういうちやちな問題ではない。システムそのものが問題すぎるのである。

アルカディアはレベルとスキルを併用したキャラ成長を売りにしていたゲームである。その世界である以上、ここまで大胆な変化があるとはカイルは思っていなかった。だがやはり、一万二千年の時は長かったようだ。

レベル制のゲームで、敵のレベルがころころ変わるなんてことほど厄介なものはない。相手のレベルが最大まで上がっても、まだ自分より圧倒的に低いような状況ならまだしも、同等以上となるときわめて困る。ダメージ計算などの上で、同じ攻撃なのに威力がまちまちなどたまったものではないからだ。ようは耐えられるはずだった攻撃に耐えられなくて死亡するとかそういう事実が多発するのである。

カイルはここまで考えると思考の海から現実に戻ってきた。彼は少々不安げな表情を見ると、ミースの方を見る。そして彼女の方に勇み足で歩いて行くと、本を差し出した。

「早かったわね。もう読めたの？」

「うん、だいたい」

「それはよかった。この本、面白かった？」

「まあね、面白かったよ。ところで本を読んで気になったところがあるんだけど……。Fゲージってのがあるよね？ あれってどれくらいまであげられるの？」

「ええと、そうね……」

ミースは少し考えこむような動作をした。彼女は頭に手を当てる
と、その人差指でコンコンと頭をたたく。そうして人差し指が五回
目のリズムを刻んだ時、彼女は何かを思い出したように口をあけた。
「二百パーセントってどこかしら。前に一度、そこまでなら上がった
ことがあるわ。ただし、そのあと疲労と筋肉痛で丸一日動けなくな
ったからそれ以上はまず無理だと思う」

「そうなんだ。あと一ついいかな？」

「なんでもきいていいわ」

「魔導士って平均でどれぐらいのレベルがあるのかな？ 受付やつ
てるミースならだいたいの平均ならわかるでしょ」

「たぶん……六十ぐらいね。でもこのギルドは大陸でも有数の実力
派ギルドだから、魔導士全体の平均となるともっとずっと低いわ」

「……よかった、それなら大丈夫だ。」

カイルは心の中で安堵した。安心はすぐに彼の顔にも表れて、明
らかに話を聞く前より血色がよくなる。その様子にミースはすこし
不思議そうな顔をしたものの、顔色が良くなる分には何も言わな
かった。

レベル六十ならば二百パーセントになってもせいぜい百二十、レ
ベル五百のカイルの敵とはなりえない。その事実はカイルに驚くほ
どの安心感をもたらした。とりあえずだが、魔導士となにかやりあ

うことになっても大丈夫なのである。何があるか分からないこの世界、それはきわめて安心できる要素だ。

こうして安心したカイル。彼はほっと一息つくと、またカウンターの前にある椅子に腰かける。そしてギルドの様子を観賞しながら、しばらく落ち着いた様子で休んでいた。すると突然、ギルドの天井が揺れた。地の底から伝わってくるかのような轟音が響いて、上から埃が舞い落ちてくる。カイルはあわてて立ち上がると、目を丸くしながらミースと顔を見合わせた。

「何が起きたんだ！　これはいったい……」

「たぶんこれはメリナの……あつ、やっぱり！」

大広間の正面にある扉がきしみを上げた。その向こうから、どこかすっきりとした表情のメリナが現れる。彼女はそのままどこかご機嫌な足取りで、カイル達のいるカウンターへと歩いてきた。その白銀の鎧はまったく汚れたり傷ついたりはしておらず、どうやらゲーツとの喧嘩に圧勝したようだ。

「……メリナ、またあなたアレをつかったのね」

「大丈夫だ、威力は十分加減してある。そんなことよりカイル、今から出かける準備をしよう。蒼の塔は遠いからな」

「ああ、そうだね。でも仲間はどうするんだ？」

「それについては問題なくなっただぞ。ゲーツが相棒と一緒にいてきてくれるそうだからな」

「無理やり言わせてない、それ？」

メリナの顔が一瞬、雪山のごとく険しくなった。カイルはとっさに、その質問をなかったことにすべく反省を態度で示す。具体的には、日本人らしく素早い動作で頭を下げたのだ。するとメリナはいつもの優しい表情に戻った。

このあとカイルはメリナと一緒に買い物をした。ギルドからの帰り道に市場に寄ったのだ。薬草、毒消し剤、携帯用の食料に服を持つていないカイルのための着替え。これらをすべてメリナのお金で買った。

薬草などの代金についてはメリナからのプレゼントということになった。だが、服の代金についてはしっかりと出せ払いで二倍にして返すという約束である。カイルはほとんどメリナからの借りが増えていることを心苦しく感じた。基本的に彼は人からものを借りるとかそういったことを好まないのだ。そのため彼はいつそうギルドに入団して働かねばならないと決意を新たにしている。

そうしてカイルが少し気まずい思いをしながらも、買い物済みせたところにはあたりはすっかり夕方になっていた。店に入るたびにメリナが必要のないものまで熱心に見たからである。やはり女性はどここの世界でも面白い物が好きなようだ。

こうして夕方になった通りの石畳に、仲良く二つの影を作りながら二人は家へと帰った。彼らはそのあと家でゆっくりと英気を養い、明日に備えて早めに床に就く。

そうしていよいよ時は流れて朝となり、カイルは塔に向かって旅立つべくメリナとともに集合場所であるギルド前の広場に向かった。

の
だ
っ
た
-
-。
。

第七話 魔導書は神性能なり（後書き）

用語がSFチックなのはわざとです。また各用語のより詳しい説明はシリーズになっている設定集の方に載せますので、よろしかったらお読みください。

第八話 波乱の旅立ち（前書き）

第八話 波乱の旅立ち

朝日に照らされる円形の広場。中央にある丸い金属のモニュメントが滑らかに光を投げかけ、敷き詰められた白い石が輝いている。その後ろには紅く燃える城がそびえて、広場を見下ろしていた。

その広場のモニュメントの脇に、二人の人間が手持ち無沙汰な様子でたっていた。一人は痩せていて背が高く、目つきの鋭い男。もう一人は紺碧の髪をツインテールにした、大きなサファイアブルーの瞳が愛らしい西洋人形のような少女。およそ似つかわしくない組み合わせではあったが、彼らは仲良く並んで何かを待つようになっ
ていた。

男の方は少々いらついたようだった。彼は懐の時計にしきりに目をやると、落ち着かない様子で足を鳴らす。コンコンとリズムが連続して、それはだんだんと速くなっていった。それを脇にいる少女はなだめるような顔をしている。

「遅せえな。あの二人なにやってんだ？」

「さあ、でもきつと大丈夫なですよ。それにまだ、約束の時間になってないじゃないですか」

「だがな、こういうとき普通は少し前にくるものなんだぞ……。おっ、来たな」

広場に向かってカンコンと小気味良い足音が近づいてきた。男が目を凝らすと、束ねた紅髪を振り乱しながら走ってくる女とそれに引つ張られてくる少年の姿が見える。間違いなくメリナとカイルだ

った。

カイルたちはそのまま待ちわびている二人の元へと一直線に走って行った。そうして二人が到着すると、男は懐から時計を出して時刻を確認する。するとちょうど時計の針は約束の時間を示していた。

「時間ぴったり、か。まったく、五分前には来いよ」

「そう怒らなくても間に合ったからいいじゃないか。それよりゲーツ、この子がお前のいつてた相棒か……？」

メリナはゲーツの隣にいた少女をみて見事に固まった。みてはいけないものを見てしまったような、そんないやな沈黙が一瞬だがあたりを支配する。しかし、そのあとすぐ彼女は女神のような温かい表情でゲーツを見た。それと同様にカイルもまた、ゲーツを雑念が取れたようないい笑顔で見つめる。

「ゲーツ、達者でな。つかまらないようにうまく暮らすんだぞ。世間は冷たいだろうが私は遠いところから応援してる」

「俺もお仲間と勘違いされないように距離をとってですけど、応援するから頑張って」

二人は目をそらしながらそう告げると、くるりと後ろを向いてどこかに去っていく。その歩く速度は速く、一切後ろは振り返らない。直後、二人の後ろからゲーツの叫ぶような声が響き渡った。しかし彼らはその声を無視してなおも一心不乱に歩こうとする。だがその時、後ろからゲーツのものとは明らかに違う華奢で高い、繊細な風の音のような声が聞こえてきた。

「二人とも違いますよー！ そんな関係のわけないでしょう！ 勘違いですから戻ってきてくださーい！」

「なんだ、違うのか。びつくりしたじゃないか」

「よかった、ゲーツさんは普通の人だったんですね」

メリナとカイルはそれぞれほっとしたような顔をした。彼らはその場でうんうんとうなずき、歩くのをやめて立ち止まる。それを見ていたゲーツはいらだたしげに叫んだ。

「おい、わかったなら早く戻ってこい！」

「はーい」

メリナとカイルは同時にどこか気のない返事をする、ゲーツの方へと戻ってきた。ゲーツはふつと溜息をつく、アイスと呼んだ少女を自分の前へとたたせる。メリナとカイルの前に立ったアイスはぺこりと頭を下げて、二人の顔を見た。

「はじめまして、私はアイスです！ ちょっと訳あってゲーツさんのもとで御厄介になってます。見た目はちっちゃいですけど、青銅級の魔導士なんですよー！」

「ほほう。その年で青銅級か、将来有望だな。私はメリナ、黄金級の魔導士だ。よろしく頼む」

「俺はカイル。……ええつとまだ見習い魔導士だけどよろしくね」

三人は手を出しあうと、互いに堅い拍手を交わした。カイルも照

れくさいのかすこしはにかみながらではあるがアイスと握手をする。そうして三人が笑顔のうちに自己紹介を終えると、一人だけ蚊帳の外となっていたゲーツが宣言した。

「よし、出かけるぞ。急がないと間に合わないからな。坊主、確か期限は一週間だったんだよな？」

「そうだよ。一週間で塔の最上階まで登らないといけない」

「だったら何か乗り物に乗らないと間に合わないな。運送ギルドへいくぞ」

ゲーツは脇に置いてあったカバンを肩に掛けた。彼は口笛を吹きながら通りに向かって広場を歩いて行く。カイルたちも急いで荷物を抱えると、彼の後に続いて広場を後にした。

四人は朝の通りを二人ずつ並んで歩いて行った。メリナとカイル、ゲーツとアイスといった組み合わせである。朝の通りはかなり混雑していて、二組のグループは少し離れて歩いていた。通りの雑踏にもまれながら、彼らは絶妙な距離感を維持して歩いて行く。

そうして四人が歩いていると、カイルがメリナの脇腹をチョンと肘で小突いた。メリナはとっさにカイルの方を振り向く。するとカイルはメリナの方に顔を寄せて小声でささやいた。

「あの、さっきでてきた青銅とか黄金ってどんな意味なんですか？ ちょっとわからなかったんですけど」

「あれは魔導士の強さを表しているんだ。これはギルドを統括している魔導書管理協会が定めていてな、全部で五階級ある。下から順に鋼鉄、青銅、白銀、黄金、白金だ。もっとも、たいていの魔導士がランク外だな」

「なるほど、ありがとう」

「なに、大したことではない」

メリナとカイルは互いに少し離れた。お互いの間に人が一人、入れるかどうかぐらいの距離だ。朝のあわただしい通行者たちを交わしながらも、二人は器用にその距離感を保ちながら通りを歩いて行く。朝焼けに照らされ紅に染まるレンガ造りの建物たちの谷間を、彼らは軽い足音だけを響かせて静かに進んでいた。

そうして進んでいる四人の目の前に馬車のマークの看板が現れた。その看板を掲げているのは大きな商館のような建物で、そのわきの道にはたくさんの馬車や、さまざまな動物たちが引く獣車が止められている。どつしりと大きく間口のとられた玄関では、朝だということにたくさんの人間が盛んに出入りしていた。どうやらここがさきほどゲーツの言った運送ギルドのようだ。

ゲーツは要領よく人の流れにまぎれて開け放たれている玄関の奥へと消えていった。カイル達も少し遅れて、なんとかそのあとを追う。すると彼らが中に入ったところには、ゲーツが小太りの商人らしき男と話を始めていた。

「蒼の塔まで車を出してくれ。お代は弾むから竜車でもなんでも早いやつで頼む」

「困りましたねえ……。蒼の塔までの途中にある砂漠でサンドワームが大量発生してるんですよ。旦那には世話になってますが、車はちょっと出せませんね」

「サンドワームだったら大丈夫だ。魔導士ばかりで四人の旅だから、出てきたら返り討ちにしてやる」

「そうは言われなくても、気配におびえちまってそもそも動物たちが走ってくれないんですよ。なので頼まれましても私どもにはどうにも……」

「……うつむ」

がつくりと力なく肩を落とした男。彼にゲーツは何も言うことができなかった。ゲーツもまた困ったような顔になって、お手上げとというようなポーズをとる。そしてとぼとぼと、鉛のように重い足でカイルたちの方へと戻ってきた。

「サンドワームの大量発生で車が出せないらしい。こりゃ仕方ない、歩くしかねえな」

「歩くと三日はかかるぞ。ただでさえぎりぎりの日程なのにどうするんだ」

「んなこといわれてもなあ……。俺にはどうしようもないぜ」

「俺にはどうしようもないって、もっとほかに言い方はないのか！」

「なんだよ、どうしようもねえのは事実じゃないか。ならメリナにはなんとかできるのか？」

「それはそうだが……」

メリナとゲーツの間に、なんともやりきれない雰囲気は漂った。ピリピリと空気が張り詰めていくのが、はたから見ているカイルたちにもわかる。それはまわりにいる運送ギルドの人間たちにも伝わったようで、ギルドの受付周辺が気まずいような空気になった。周りにいた人間たちは彼らから微妙に距離をとり、遠巻きに人垣を作る。

カイルとアイスはどうか二人を落ち着かせたいのだが、いかんせん今回のことに関しては彼らにどうしようもない。なので心配そうな顔をして二人を見守ることしかできなかった。その間にも、二人の間の険悪感は増していつてしまう。このままでは昨日のように喧嘩を始めかねない状況だ。

その時だった。十代半ばだろうか、一人の小柄な少年が大人たちをかき分けて前に出てきた。彼は緊迫した雰囲気を出しているゲーツとメリナの間に割って入ると、両腕を広げて二人を引き離す。そしてかぶっていた帽子を格好つけるようにひねると衝撃的な言葉を発した。

「まあまあ、落ち着いて。話は聞いたぜ、その依頼だったら俺が受けてやってもいい」

「小僧、何をいつてやがるんだ？ そんなこと無理だろ」

「それができるんだな。何せ、俺の車は動物を使つてないんだ。だからたとえばサンドワームがうじゃうじゃ湧いてきても、その中を突っ走れるんだよ」

「動物を使つてない？　じゃあなんで走るんだ？」

ギルドの人間もカイル達も思考が一つにまとまった。彼らはそろって黙り、ギルドの中は静寂につつまれる。さきほどまで険悪な空気を垂れ流しにしていた二人も、そろって口をぽかんとあけてしまった。彼らは真ん丸な目で、少年の浅黒い彫りの深い顔を見つめる。

そのとき、さきほどゲーツと話した男がはつとしたような顔をした。彼は興奮したように勢いよく口を開くと、次から次へと矢継ぎ早に言葉を紡ぎだす。

「ロイ坊、お前まさかあの『がらくた』を使うつもりか？　燃料は一体どうするつもりなんだ。あれはいちいち動かすのに膨大な魔力がいるんだろ？」

「燃料なら大丈夫だぜ。今回のお客さんは全員魔導士さん。しかもおやつさんが『旦那』なんて呼ぶくらいだ、おそらく相当高位のな。だったら燃料の魔力なんていくらでも手に入るだろ」

「確かにそうかもしれない……。だが、あんなものが砂漠の環境に耐えられるとは思えん。わしは反対だぞ！」

「あれでも馬とかよりよっぽどタフなんだけど……。ま、古いおやつさんを説得するのは無理そうだな。どうだいお客さん、おやつさんは反対してるけど俺に賭けてみないか？　相当急ぎの用事みたいだけど、ほかに手段はないだろうぜ」

「こら、ロイ坊！　いい加減にしないか！」

男は無理やりに少年を引っ張り、外へ放り出そうとした。少年はじたばた手足を振りまわして抵抗するものの、男の太い腕は頑としてその体を離さない。そのまま彼は引きずられて、運送ギルドの玄関まで連行されていった。だがそのとき、その進行方向に細い影が立ちふさがる。空気をはらんでふわりと膨らんだその影は、明らかにローブを着たカイルのものだった。

「おじさん、ちょっと待ってくれ。ねえ君、俺たちの依頼を受けてくれないか？　どうやら君しか出来る人はいないみたいだし」

そう冷静に言い放った時、カイルの顔は何やら確信めいていたのだった――。

第八話 波乱の旅立ち（後書き）

今回は全小説を通して過去最長です。といっても4500ぐらいしかないのですが。でも、いままで3000ぐらいしか書いてこなかった私にとっては確かに最長なのです。

これからもちよつとずつ、ボリユームのある物語といつものを目指していけたらと思います。

第九話 砂漠の暴君

青い金属製の四角い物体が草原をすっ飛んで行く。大きさは大型の馬車ほどだろうか、不格好に金属管などを晒したそれは草を薙いで風を切っていった。そのむき出しとなっている座席には五人の人間が座っている。ローブや髪を風になびかせるその姿は、間違いなくカイル達だ。

「速いな、これならあと一時間ほどで蒼の塔までいけるぞ」

「みんな馬鹿にしてたけど、ほんとはいしたもんだろ！」

「ああ、そうだな！」

「うう、それはいいんだけど。これはなんとかならないのか……」

「しょうがないだろ、急な用事でタンクにあらかじめ燃料を貯めておけなかったんだから」

ロイはカイルの方に振り返ると、少しきつい口調で言った。だがカイルはもごもご言いながら、頭に付けられているカチューシャのようなものを触る。それは上部に三角の金属部品がつけられていて、そこからさらに細いコードが接続されていた。そのコードは車の後方にある機械へとつながれている。このコードを通じて、カイルの魔力を車に供給しているのだ。

カイルのやっていることは別段おかしいことではなかった。しかし、はたから見るとネコ耳付きのカチューシャでもつけているようだ。色白でことなく女顔をしているカイルは、そのカチューシャ

が異様なほど似合ってしまう。彼はそのことがよほどいやなようで、恥ずかしそうに四人から視線をそらしては外ばかり見ていた。

緑の絨毯はさわさわとそよぎながら、またたく間に走り去る。時折見える木などはあつという間に後ろへ飛んでいく。風は涼やかでカイルの頬を心地よく撫で、空は晴れ渡っていた。その牧歌的で、なんとも心地のよい景色に少し傷つきかけていたカイルの心もいやされる。

ロイの車は見た目こそぼろだったが、スピードなどの性能は地球の車よりも良いくらいだった。今より進んだ古代技術とやらを利用して、なんでもこの車は彼の父親と彼自身が、遺跡から掘り出した図面や部品を基にして十年かけて制作した自信作なのだとか。ちなみに、ロイはこの車の維持費などのために運送業もやっているが本職はメカニックである。

もともと、この車は走らせるために膨大な魔力が必要らしい。しかも魔力はその性質上長い間は保存しておけないんだとか。そのため普段この車はまったく燃料が入っていない。カイルが今回力チューシャをつけて魔力を注入しているのも、このせいであった。

こうしてカチューシャを着用したカイルが外を見ながらのどかな気分で物思いにふけっていると、周りの空気が変わってきた。草原の少し湿気をはらんだ涼やかな空気から、乾いた熱い空気へと。カイルは暑くなってきた気温に顔をしかめると前方に目をやる。すると、彼の予想から斜めにそれた物体が見えてきた。

「あれが蒼の塔……なのか？」

「どうだ、想像していたより高いだろう。びっくりしたか？」

「いや高いって次元じゃないでしょ……！」

「まあな、上のほうに行くと空気が薄くなって息苦しいぐらいだ」

カイルはなにか茫然とした顔で蒼の塔を見つめた。メリナは予想通りのその反応に、したり顔になる。だが実際問題、カイルは茫然とせざる負えなかった。蒼の塔は彼の常識を破壊する、超建築とでもいうのが適当な建物だったのだ。

塔の高さは尋常でなかった。かなり遠くからみているというのに先端が見えない。雲を突き抜けて空の果て、成層圏までも続いていそうなほどだ。しかもその圧倒的な高さに対して太さが不足している。普通の塔にしてはかなり太いのだが、天まで突き抜けてそうなほどのこの塔を支えるには到底足りそうもない太さだ。

とても地上にどっしりと立っている、という雰囲気の高塔ではない。むしろ、空からなんらかの力でつるされているという方がしっくりくるほどだ。それは今にも出来そこないの積み木よろしく、倒れてしまいそうな不安をあおりたてる。カイルはこれからこの塔を登るのかと思うと一幕の不安に駆られた。

心配症のカイルがそう不安に思っている間にも、車は塔の周りに広がる砂漠地帯へと突入した。まるでそこだけ上げてしまったような円形の砂漠は、塔を中心として見渡す限りに広がっている。その砂は綿ぼこりのように細かく、歩いて突破するのは困難のようにカイルには見えた。

「ここがサンドワームの住んでる砂漠ですか？　というかここだけ砂漠なんですねえ」

「ああ、塔の周りだけ草原がはげててな。半径十キロ近くにわたって不毛の大地が広がってるんだぜ」

「へえ、これだからサンドワームさんが繁殖しちゃうわけですね」

アイスがそういうと、カイルたちはそれぞれ魔導書や杖を手に外に警戒を始めた。外はすでに一面荒涼とした砂漠の大地で、生命の気配はおよそしない。だがその時、西の方角で砂丘がもごもごとうごめいた。小山ほどもある不自然な砂の盛り上がりは、カイル達の手がかりを付けて猛然と突進してくる。たちまち西を警戒していたメリナが声を張り上げた。

「まずい、サンドワームだ！ しかも群れだぞ！」

「マジかよ！ カイル、お前は車に全力で魔力を注げ！ それでロイはパワー全開でぶっ飛ばすんだ！」

「わかったよ！」

「オツケー、アクセル全開だぜ！」

ロイは足元のペダルを全力で踏み込んだ。エンジンが咆哮をあげて、衝撃とともに青い車体が一気に速度を上げる。砂を巻き上げながら、車は矢のように砂漠を走りだす。だが一分もたたないうちに後方に積まれている排気口から、鉄をこすり合わせたような嫌な音が響いた。

エンジンの音から勢いがなくなっていく、車の速度が下がり始める。ロイはアクセルを蹴るように何度も踏み込んだがそれはかわら

ず、車の速度は結局もとの速度と変わらないところまで落ちてしまった。それとは対照的にサンドワームはどんどん速度を上げているようで、砂の盛り上がりとの距離はぐんぐんと迫っていく。このままでは接触するのは時間の問題だ。

「くそっ！ 排気口から砂が入ったみたいだ！」

「おいおい、親父の言った通りじゃねえか！ どうするんだよ、やつこさんそこまで来てるぞ！」

「こうなったらしょうがないです、私が最強魔法で凍らせてみるのですよ！」

アイスが魔導書を片手に立ち上がった。彼女は魔導書をそのまま胸の前に持つてくると、目を閉じて口を開く。たちまちその小さな口から、清浄なる響きを持った力ある誓約の言葉が紡ぎだされた。

「我は氷の誓約者なり。今こそ秘められし力を持つ書よ、その力を我に！ 聖氷の書フロスト、リンクフォーム！」

砂漠の空気がにわかに凍てついた。アイスの周りに七色に瞬く雪の結晶が舞い落ち、夢幻に輝くオーロラのような光が現れる。光はアイスの華奢な体をのみこんで、その姿を氷の主と呼ぶにふさわしい装いに変えた。虹色に輝く白銀の衣がアイスの体に絡まり、体の間接を透き通る青い結晶が覆う。書自体も青き宝玉を先端に戴く白き杖となって、アイスのたおやかな手に収まった。その宝玉が青い閃光をもつてあたりを凍てつく輝きで満たすと、同時に姿を変える間は閉じられていたアイスの目も開かれる。

アイスの目はさきほどまでの愛らしいものではなかった。氷のよ

うに冷徹で、静謐な光をたたえている。彼女はその瞳で迫りくる砂の小山たちを一瞥すると、杖を眼前に構えた。

「氷よ、汝はなんと美しい。白銀の世界に幸を、凍えて途絶えし命に安らぎを。動きを止めしすべてのものに永遠の繁栄を！ アブソリュート・ゼロ！」

刹那に吹きすさぶ寒風、氷の爆発。砂漠に白い世界が現出する。巨大な氷柱が次々と地面からそり立ち、車の後方にあつた大きな砂丘がまるごと一つ氷に閉ざされた。車を追いかけてきていた砂の小山は動きを止める。地の底から何かがぶつかるような、ドンという衝撃が何度も連続して大気を揺さぶった。

「結構すごいな。アルカディアの上級魔法ぐらいの威力はあるかな」

「すげえ……」

「どおりである年で青銅級になれるわけだな。威力だけなら一級品だ！」

「さすがだぜ、アイス」

四人はそれぞれ違った反応をアイスの魔法に示した。とくに、カイルとロイは目を丸くして驚いている。それはロイの場合は単純に魔法をみたことがないから、カイルの場合は知っている魔法との威力の差異からだった。

アルカディアの魔法はそこまでの威力はない。マップの加減でそこまで大威力にはできないからだ。ゆえに広範囲の殲滅魔法というのは非常に限られていて、数種類しかない。数え切れないほどの魔

法があるのにだ。

だが、この世界の場合はマップの制約というものがない。だからどれだけ威力があってもさほど問題はないのだろう。だから広範囲の殲滅魔法が発達しているのではないかという仮定が、カイルの頭の中で成り立った。もっとも、彼の仮定であってそうであるという保証はどこにもないのだが。

そんなカイルの考えなど知らないアイスは、その場でへたり込んでしまった。顔は赤くなっていて、服も元のものへと戻ってしまう。どうやら大魔法の行使は彼女の体に大きな負荷をかけたらしい。

「疲れたのですよ……。ちょっと休ませてください」

「ああいいぜ、当分休んでろ」

「サンドワームも倒れたことだし、あとは蒼の塔まで行くだけだからな。予想以上に早く着きそうだから、多少休憩してもいいだろう」

「わかったぜ、車を止めるよ」

メリナがそういうと、ロイは車を止めた。ふわふわとわずかに浮いていた車体が地面へと降りる。だがその瞬間、堅いものが裂けるような音が車の後方から響いて来て、車が大きく揺れた。

「なんだ！　うわあ！」

「アレを突破してきやがったのか！　化け物だな！」

車の後方に、恐ろしく巨大な芋虫のような生物の群れが現れた。

その生き物は小さなものでも、五人が楽に乗れる車が模型に見えてしまうほどの大きさだ。その巨体の群れが、氷に体を裂かれて沼の水のように汚濁した緑の血を流しながらもカイル達に向かって突進してきている。その大地を飲み込むかのような迫力に、カイルたちの背筋は戦慄した。

「逃げても間に合わない、戦うしかないよ！　僕が広範囲殲滅の魔法を撃つから援護して！」

「ふん、援護するどころか殲滅してやるぞ！」

「任せとけ坊主、何分でも持たせてやるさ！」

二人はそれぞれ「リンクフォーム！」と声の限りに叫んだ。メリナは灼熱の炎をイメージしたような紅の甲冑に、ゲーツは闇色の未来的なフォルムを持つ特殊部隊のような戦闘服にそれぞれ姿を変える。彼らは紅く燃えたぎっているような大剣と大砲のような砲身を持つ銃を構えて、押し寄せるサンドワームの大海嘯へと身を投じていった。獲物を狩るような、獰猛で鋭い輝きを目に宿しながら。生粋の戦い好きである彼らはこの状況においてもまったく絶望などしていないのだ。

カイルもこの状況を一刻も早くなんとかすべく、全精力を注いで呪文を紡ぎ始めた。一字一句、間違えないように正確さを追求しつつも極限まで早く、はやく。唇が擦り切れるような速度で言葉を吐き出していく。

こうしてカイルたちとサンドワームの大群との壮絶な戦いの幕が切って落とされたのだった――。

第九話 砂漠の暴君（後書き）

次回はいよいよ主人公が活躍する回です！ ご期待下さい。

それと今回登場したもののわかりやすいイメージを言っておきますと……

蒼の塔

某野菜人アニメのカ〇ン塔ぐらいの高さの塔。太さの方は普通のマシヨンより一回りでかいくらい。

サンドワームの大群

イメージとしてはナ〇シカの王蟲の群れぐらいのイメージ。もちろんあそこまで大規模でも頑丈でもないけれど

第十話 脅威、最強魔法

「せやあああア！ 紅蓮一刀斬！」

裂帛の叫びとともに、紅に燃える刃が振るわれる。空気は裂けて、紅い斬撃がその間隙を走る。放たれた一撃はゴム質の外皮をやすやすと切り裂いて、濁った緑の鮮血があたりにほとばしった。サンドワームは半身を空に高く上げると、そのまま左右に分かれて轟音とともに崩れて砂に埋もれる。細かな砂の粒子が舞い上がって煙のようになり、メリナはたまらず目を細めて顔をしかめる。

彼女がそうして一匹倒すと、すぐに脇からまた新手の敵が現れた。まったくいくら倒してもきりが無い。だがメリナは再び剣を構えると、新たなサンドワームへと突入した。

そのメリナのすぐ近くではゲーツが銃を乱射していた。雷鳴がとどろくように銃声が連続しては、青白い光が敵を穿つ。そのやわらかな肉を吹き飛ばされて、サンドワームは体中から次々と汚濁した血を撒き散らしては動きを止めていった。しかし次々と新たなサンドワームが、すでに動かなくなつた仲間を強引に這い上つてはゲーツに迫ってくる。ゲーツは弾を装填しながら徐々にではあるが後退していった。

戦闘が始まってから、まだわずかな時間しか経過していない。だがサンドワームたちの異常なまでの物量にすでに二人は押され始めている。まだカイルたちの付近へは侵入を許していないが、いずれにしろ時間の問題だ。滔々と濁流のような勢いで攻めよせるサンドワームに対して、二人はもう後がない。カイルたちのいる車まであとわずかな距離しか残されていないかった。

「くっ！　なんて数だ！　カイル、魔法はまだか！」

「まだ……あともう少しだ……」

「わかった、もう少し何とかしてやる！」

メリナは視界いっぱいに迫りくるサンドワームを一瞥した。彼女はそのまま少し後ろにいるゲーツと目を合わせると、気合いを入れなおすべく準備を始める。彼女は大きく息を吸い込み、足を肩幅に開いてしっかりと大地を踏みしめた。

「……はああああア！！！！」

メリナは拳を握りしめて、全身に力をみなぎらせる。その細い富士額にはスツと血管が浮かびあがって、それに同調するかのように精神も高ぶっていく。心が震え、その根底にある魂も脈動する。心臓は早鐘を打ち、体中がカツと燃えるように熱を帯びた。すると、彼女の持つ大剣にはめられている紅の宝玉がボウツと淡い光を帯びた。メリナの視界の端に写されている、緑のバーもにわかに伸び出す。九十、百、百十……。バーの下に表示されている数字も次々とめまぐるしく移り変わっていった。

数字が百三十と示したところで、緑のバーは動きを止めた。それと同時にメリナの足が地面を蹴る。腹の底に響く衝撃音が轟いて、彼女の体は弾のような速さでサンドワームの群れに向かって飛び出した。その刹那、燃える刃が閃いてサンドワームの巨体から血がほとばしる。サンドワームはおぞましい雄たけびと轟音を響かせながら砂漠に横たわる骸となった。メリナはそれを横目で確認すると、すぐに次のサンドワームへと進路を向ける。スピード、パワーその

すべてがさきほどまでより一回り以上の向上を見せているようだった。

「メリナのやつ、ここにきてさらに燃えてやがるな。俺もやるとするか、雷嵐弾！」

ゲーツもメリナに負けじと先ほどよりも激しい攻撃を始めた。青白い光弾が吹き荒れて、まさに壁のような勢いでサンドワームの群れを押し返す。この時、彼の視界に移る緑のバーもまたメリナと同様に百三十という値を示していた。二人の戦闘力の向上はすべてのFゲージの上昇によるものなのだ。

Fゲージというのは、魔導書の動力源たるジェネレータと人間の精神を直結させるシステムである。これにより、一時的に百パーセント以上の力を発揮することも可能なのだ。ただし、完全に自由にコントロールできるわけではない上に逆もありうる。つまり、精神状態次第ではマイナスの効果もありうるのだ。しかも、百パーセント以上の力を発揮するときには大きな負担がかかる。とくに二百パーセントを超えるような状況になると、体に負荷がかかりすぎて死ぬことさえざらだ。

だが、このような問題点があってもFゲージシステムはきわめて有用なシステムには違いない。現にメリナたちも完全ではないがある程度Fゲージをコントロールすることにより、ここぞというタイミングで力を発揮することができるのだ。ある意味で魔導士は追いつめられた時こそ真価を発揮する。

二人はサンドワームの群れをわずかに押し返し始めた。一步一步だが、着実に二人は前進していく。紅い斬撃や、青い光弾が放たれるたびにサンドワームはその数を一匹ずつ着実に減らしていった。

しかしそのとき、メリナの体が崩れた。彼女はそのまま、砂を舞いあげながら膝を屈する。

「大丈夫か！」

「なんとかな……」

「くそつ、カイル！ まだなのか！」

「まだだ……これじゃこいつらを倒しきれない！」

カイルの眼前にはすでに、白く輝く光の球があった。大きさはカイルの頭ほどだが、それは圧倒するような膨大なエネルギーを周囲に放っている。その球を台風の目のようにして周囲には暴風が吹き荒れて大気を閃光が走っていた。カイルはそれに向かってその膨大な魔力を注ぎこみ続けている。

カイルの使おうとしている魔法は、アルカディア最強魔法との呼び声さえある「メギド・ジハード」という魔法だ。これは魔力の球を中心として巨大な火球を形成する魔法で、これが当たれば最強クラスのボスキャラでも大ダメージは免れない。

ただし、その制約はすさまじい。詠唱の長さもさることながら、魔力を球にためるために非常に長い時間を有するのだ。その時間は約三分間。一秒単位で戦況が変わるボス戦においてこれはきわめて長い時間だ。そのため、ほぼ一撃必殺に等しいような威力を有する魔法だが使用された例は少ない。かくいうカイルもこれを使用するのは久しぶりだ。

カイルは魔力を絶え間なく球に注ぎ続けた。そのおかげか、球は

どんどん輝きを増していき周囲の砂などが巻き上げられていく。そしてとうとう、サンドワームを焼き払えるだけの魔力が蓄えられた。カイルは杖を構えると、慎重にサンドワームの群れの中心に狙いをつける。

だがその時、メリナに一頭のサンドワームが襲いかかった。彼女はとっさにかわそうとするものの、その動きは緩慢。とてもサンドワームの巨体をかわしきれない――。

「メリナさああアーン！」

「メリナああアーン！」

カイルとゲーツは雄たけびを上げた。彼らの叫びは砂漠の大気をとどろかせ、天に響く。妙に時間が間延びして、彼らにはサンドワームの巨体がメリナに襲いかかるのがひどくゆっくりに見えた。上空に跳ねたサンドワームの体が、ゆっくりゆっくりメリナの上へと落下していく。しかし、そんな間延びした時間を鋭い炸裂音が突いた。それと同時にサンドワームの体が爆発して、その軌道がメリナから外れた。カイルとゲーツはすぐに振り向くと、その炸裂音の出所を確かめる。するとそこには、風変りな銃のような物体を片手にひっくり返っているロイの姿があった。

「へへっ、俺だっているんだぜ！」

「ありがと！ さあ行くよ、伏せて！ …… メギド・ジハード！！！」

カイルの杖が球を押し出した。球は青い一条の線を描きだしながら、響く金属音とともに宙を切る。それは勢いを緩めることなく針に糸を通すような正確さでサンドワームたちの中心に着弾した。

止まる時間、失われた音。沈黙が来襲して周囲の一切がその動きを止める。カイルたちもサンドワームたちもともに石化して、その場に固まった。わずかにはらはらと落ちる砂だけがこの場で動く唯一のものだった。

直後、あたりに陽光をも軽く飲み込んでしまう白い閃光の津波が押し寄せた。熱と衝撃波も同時に炸裂する。砂とサンドワームの巨体はいっしょくたになりながら巻き上げられ、神が天上から空を叩きつけてきたかのような大気の鼓動が巻き起こった。さらにそのあとを青く燃えたぎる集熱の炎が半球状になりながら飲み込んでいく。

「ふおおお！」

「おわああああ！」

そのとき眠りについてしまっていたアイス以外の四人は声の限りに叫びをあげた。彼らは吹き飛ばされてくる砂や焼きつくような光に思わず目を閉じて絶叫している。彼らは爆風に負けないように懸命に足を踏ん張りながら、その惨禍の中を数十秒にわたって耐えた。それは彼らには永遠に思えるほど長く感じられる数十秒だった。おそらく、彼らの生涯の中でもこういうときは数えるほどしかなかったことだろう。

「うつつ……。おかしいな、ここまで威力はなかったはずだけど……。うわああああ！」

最初に目を開いたカイルは周囲の状況を見て、思わず絶叫した。彼の目の前にあったのはさきほどまでの砂丘ではなく、巨大なクレターだった。彼のいた位置からでは底が見えないほど深く、その

周囲の砂はすべて焦げたように黒ずんでいる。サンドワームは一頭残らず粉々に吹き飛んでしまったようで、肉片一つそこには残されてはいなかった。ただ肉が焼けたような鼻をつく臭いと、肌を焦がすような熱気が充滿しているだけだった――

カイルがそうして茫然としているころ。その砂漠から遠く離れた地下深くに暗い部屋があった。その黒曜石のように黒い床には天使語からなる複雑な呪文が刻まれ、壁には十字架に槍が撃ち込まれている紋章が描かれている。それはさながら、教会に掲げられる宗教画のようなある種の迫力を感じさせた。ただし、それから感じられるのは申請で高潔なイメージなどではなく、ある種の悪魔的な存在であったが。

その宵闇が沈殿して出来たような深い闇に包まれる部屋の中央には、五角形のテーブルが置かれていた。その頂点にあたる部分にはそれぞれ五人の男たちが座っている。彼らは皆、顔全体を覆うような白いのつぺりとした道化のような仮面を着用していてその顔はうかがい知れない。だが、その目の隙間からはときおり皓皓と輝く冒瀆的な視線が見て取れた。

五人はテーブルの中央にある水晶に目を奪われていた。それには大陸の地図のようなものが示され、そのちょうど中央からやや西南西に外れた場所が激しく点滅している。それはくしくも、カイルたちがいる砂漠の位置とぴたりと一致していた。彼らはそれを見ると、体を揺らして息を急ぐ。

「この強大な魔力反応、間違いない。やはり始祖だ」

「だが、なぜ始祖が今頃になって……。連中は旧世界とともに滅びたはずだ」

「第四エノクの示す裁きの時が近づいておるからな、その影響かもしれない。だがこれは好都合だ。この始祖をうまく使えば、我らの計画の進行に有益だろう」

「それはもしや……生命の樹の核にこの始祖を使うということなのか？」

「コピーを使うよりはオリジナルを使った方がよかるう。あれはしよせん、紛い物にしかすぎぬからな」

そういつて男は恐ろしい笑いを響かせた。それに続き、ほかの四人も笑い始める。笑いというのは本来、もつとも人間味が出るものだ。だが五人の男たちの笑いにはそういったものの一切が欠けている。さながら、人間の形だけを模した機械が笑っているようだ。それはひどく醜悪で狂気に満ちている。しかしその不気味でなんとも嫌な笑いは、暗い部屋にしばらくの間こだまし続けたのだった――

第十話 脅威、最強魔法（後書き）

カイルの使った魔法の威力が異常ですが、それについての説明はまた後日ということでお願ひします。

第十一話 塔に秘められしもの（前書き）

中盤あたりはかなりコメディイですが、終盤はかなりシリアスな話になるのでご注意を。

第十一話 塔に秘められしもの

カイルは自身の使った魔法の威力に半ば恐怖していた。肉の焦げたにおいが鼻につき、彼の心をざわめかせる。彼は腰を抜かしてしまったようにへたりこむと、顔を蒼くして息を荒くした。そのさまは死神に肩を叩かれてしまった瀕死の病人のようだ。

カイルがそうして蒼くなっていると、メリナたちが魔法の衝撃から回復した。彼女たちはおそろおそろ目の前に広がるクレーターを覗き込むと、その深さと立ち上る臭氣に顔をしかめる。そして戦慄したようにぎこちない動きで首をひねると、へたりこんでいるカイルに振り向いた。

「おいおい、すげえ魔法だったな。俺はこんなの初めてだぜ……」

「私もだ……。これほどまでの威力とは思わなかったぞ」

「……本当はここまでの威力は出ないはずなんだ。ありえないよ、僕も信じられない」

「あん？ 自分の魔法なのによくわからないのか？」

ゲーツは眉をひそめた。彼の額には深い溪谷が形成されて目つきが鋭くなる。メリナも彼ほどは露骨ではないが、少し目に疑いの色を浮かべた。カイルは彼らの態度に小さくだが非常にゆっくりとした動作でうなづく。彼自身もまた、うなづくことで事態を整理しようとしているかのようにだった。

「ほんととはあんな威力は出ないはずなんだ。せいぜい五分の一ぐら

いだよ。少なくとも、僕の故郷じゃそうだった……」

「マナの濃度が濃い地域とか魔力の密度の高い地域になると魔法の威力が上がるということはあるが……。そういうことかもしれないな。どっちにしろ、これからは気をつけないといけないぞ。俺たちまで巻き添え食うようではたまらん」

「ああ、ゲーツの言う通りだな。カイルまで吹っ飛んだりしたら困るんだから」

メリナはそう心配そうに言うと、青い顔をしているカイルに肩を貸そうとした。だがむしろ、彼女の方が戦闘の疲れなどが蓄積されていたらしい。カイルの方が逆にふらついた彼女を腕で抱きかかえるようにして支えてやった。メリナは少し気恥ずかしそうに顔を赤らめたが、黙ってカイルの腕に抱かれる。それをみたゲーツはヒュウと口笛を吹くと、そのまま二人から離れて行った。

しばらくして五人はまた車に乗って出発した。そのころには疲れで眠ってしまったアイスも目を覚まして、愛らしい姿で四人を和ませる。彼らはそのまま砂漠をひた走ると、蒼の塔の姿がいよいよ近づいてきた。高さの割に太さはないといえど、蒼の塔が恐ろしく巨大な建築物であることに変わりはない。五人は少しその威容に圧倒されながら、その真下へとたどり着いた。

「さすがに高いなあ……頂上が見えないよ。これじゃ上がるの大変そうだな」

「全力で階段を上るだけでも丸々二日はかかる。帰りはえれべーたーとかいう機械ですぐに帰ってこれるが、登る途中でモンスターとの戦闘もあるから、時間はぎりぎりだな」

「じゃあ急がないと！」

カイルはさっそく車から飛び降りると、ぽっかりと口をあける塔の入口へと駆けた。塔の外壁は継ぎ目一つない青い金属のようなもので出来ていて、傷一つ付いていない。その冷たい質感の外壁がカイルを鏡のように映し始めたところで、カイルに向かって後ろから声がかけられた。

「待つんだ、今から入ったら塔のモンスターの餌食になるぞ！ここはゆっくりと休むべきだ」

「えっ、でもメリナさん。急がないと間に合わないよ！」

「大丈夫だ、普通に登ったら二日かかるが一日ですむ裏技がある」

「なんですか、それ？」

「明日になったら教えてやる。さあ、今日はここで野営するぞ」

メリナは口元をゆがめて不敵に笑うと、車から大きなカバンを取り出した。彼女はそこから素早くテントを取り出すと、さっさと設営に取り掛かる。ゲーツやアイスもメリナの意見に賛成のようでその作業を手伝い始める。こうしてカイルたちは塔のふもとで野営をすることになった。

「また迎えに来るからな〜！」

翌朝、ロイは車の修理を終えると朝一番で街へと帰っていった。ちなみに燃料に関しては、あらかじめ昨夜のうちにカイルから取り込んで蓄積してある。半日かかってしまうものの、燃料自体をためておける装置はあるのだ。時間がかかるので行きは使用されることがなかったが。

とにかくそういうわけで、彼は街へといったん帰った。またカイル達が塔を降りてきたあとで、ここまで迎えに来ることになっている。カイルたちは去っていくロイをひとまず見送ると、今度は自分たちが登るべき塔を見据えた。

塔は朝焼けに染まり、青い外壁が紅く燃えていた。その光は空の果てめがけて高く高く続いている。カイルは一瞬その高さに圧倒されてしまったが、メリナの言った裏技のことをここで思い出した。メリナの言う通りなら、この塔をたった一日で登れるはずなのだ。

「さあて、メリナさん。この塔を登るのにどんな裏技があるのさ？」

「あれをしてみる。塔の中ほどにある少し出っ張った部分だ」

塔の中ほど、雲を一つ突き抜けた高さの部分。そこがちょうど、きのこの傘のように張り出していた。カイルがよくよく目を凝らしてみるとその傘の上に、針の先ほどではあるが穴のようなものが見える。カイルはメリナの言わんとしていることを察して、少し顔を青くした。

「あそこから塔の中に侵入するつもりなのか？」

「ああ、あそこからならだいぶ登る距離が少なくて済むからな」

「……あそこまでどうやって上がるつもりなんだ？ 僕、空なんて飛べないけど」

メリナはニヤツと底の見えない笑いをカイルに向かってした。彼女はくいくいと指を曲げると、アイスとゲーツを呼ぶ。アイスは不思議そうな顔、ゲーツは見るからに嫌そうな顔をしてメリナの方に来た。

「ゲーツ、お前から先陣を切ってくれ。やり方はわかるな？ 今回は近くに石がないからアイスの氷で代用するんだ」

「いつものあれであの高さまで上がるのか？ 落ちたら死ぬぞ、無理だ！」

「無理をしてくれるのがゲーツだろう。さあアイス、人が乗れるくらいの厚い氷の板を作ってくれ」

「わかったです。でもあんまり無茶なことはいしないでくださいね？」

メリナは親指をぐつと上げると、アイスの前に突き出した。アイスはそれを見て目を輝かせると、嬉々とした様子で魔導書を片手に変身する。そしてものの数十秒で人が一人乗るのにちょうどよい、座布団より一回り大きいぐらいの円盤状をした氷の板を創り出した。

「これでいいな。よし、ゲーツこれの上に乗るんだ」

「はあ、マジかよ……」

「こら、文句を言つな。さつさと乗れ！」

メリナ足でもって、ゲーツを強引に板の上に乗せた。ゲーツはいよいよ額の皺を深めて渋い顔になる。その曇った目はメリナに向けられ、彼女を痛烈に非難した。だがメリナはそんな彼に構うことなく魔導書を手に呪文を唱える。紅い炎のようなものが彼女の体を包み込み、鎧が発光する。その炎が消えたところにはメリナは紅の鎧に身を包み、輝く大剣を構えていた。

「飛んでけええエ！ 爆炎斬！」

「うおおおっ！」

メリナの剣の切っ先から炎の球が飛び出した。手のひらサイズより一回り大きい球はゲーツの立っている板の下にもぐりこみ、大爆発を起こす。ドンと地響きがして爆風が吹き、ゲーツの姿がどこかに消えた。代わりに高いところから聞きがたいほどの絶叫が轟く。カイルとアイスが空を見上げると、そこには爆発の衝撃によってほとんど空の高みへと上がっていくゲーツの姿があった。

ものの数秒で、ゲーツの姿も彼の響かせる絶叫も空の彼方へと消えていった。手を額に当てながらそれを見ていたメリナは、彼の姿が消えたことを確認するとカイル達の方へと向きなおる。カイル達は唇を紫色にしながら彼女の顔を見た。

「あの方法で上まで登るんです？」

「そうだ、ああやって登る。わかったら氷の板を作ってくれ。次はカイルの番だぞ」

「さ、三人で一緒に飛ばないか？ 一人は嫌だ！」

「うむ、二人とも初めてだからな。それはいいかもしれん。じゃあアイス、今度は真中に穴のあいた板を作ってくれ。三人が乗れるくらいのを頼む」

「わかったです……」

アイスは泣きそうになりながらも、地面を凍らせて氷の板を作った。メリナは出来上がったそれを足で蹴って強度を確かめる。堅いブーツを履いた彼女の蹴りでも氷の板はヒビ一つ入らなかった。メリナは満足そうにほほ笑むと、カイル達を呼ぶ。カイルとアイスは死刑台に赴く死刑囚のように深刻そうな顔をして、彼女の元へとゆっくり歩いて行った。

「よし飛ぶぞ！ 二人とも私にしっかりとつかまれ」

メリナの力強い言葉に、アイスは迷うことなく彼女の体にしがみついた。しかし、カイルは顔を紅くして一歩後ろに下がる。彼はしきりにメリナの胸元を見ていた。鎧がそこだけはだけになるようになっていて、中から豊満な白い溪谷がのぞいて見える。それを形作る山の大きさはだいたい大玉のメロンほどだろうか。時折、ふるふると波打っていてやわらかそうである。

「何をやってるんだ、ほらさっさと来い！」

「わ、わかった」

カイルは体を小さくするようにして彼女の元へと近づいていった。

そうして近づいてきたカイルをメリナは腕でしっかりと抑えつける。カイルは顔にやわらかい感触を感じると、熱を出したように顔を紅くしてぼんやりとした表情になった。しかしその手はしっかりとメリナの細い腰を抱きしめる。これから飛ぶ恐怖からなのか、それとも男だからか。実際のところカイルが何を考えているのかは誰にもわからないが……。

「行くぞ、爆炎斬！」

メリナは剣を振り上げ、炎の球を放った。球は板の真ん中にあけられている穴から地面に直撃し、轟音が響く。その直後カイル達は強烈な押しつぶされるような感覚に見舞われ、同時に空へと飛びあがった。

空気は固い壁のようだった。それをカイル達は耳を裂くかのような強烈な摩擦音とともに貫いていく。地上はみるみるうちに小さくなり、あたりは青になる。雲を抜け、冷たい空気の層を跳ねのけて彼らは遥かなる空の高みへとぐんぐんと迫っていく。視界は広くなり、近くの砂漠や草原だけでなくはるか遠くの山々までもがカイル達には見渡せた。それでもまだ、カイル達を乗せた板は上がる。そしてついに重力によって板が失速し始めた時、彼らの目に巨大なテラスのようなスペースが見えた。そこにはカイル達の方に向かって手を振るゲーツの姿も見える。

「飛び移れえええエ！」

メリナの号令以下、カイル達は板を蹴った。彼ら三人の体はふわりと空に舞い上がり、弧を描くようにして無事にテラスへと着地する。代わりに足場とされた板は、はるかかなたの地上へと消えていった。きらきらと光るわずかなしずくだけを残して。

「つ、着いたア……」

「死ぬかと思っただす……」

カイルとアイスはその場にへたり込んだ。すっかり腰が抜けてしまったようで、顔が青い。唇も少し紫に染まっただけで、それが彼らの感じた恐怖を如実に表していた。二人はしばらくそのまま荒い息をし続ける。

そうしていると、メリナが二人に近づいてきた。彼女は人さし指をピンと伸ばすと、空を示す。カイル達が何かと思っただけでその先を見ていると、芥子粒ほどにしか見えないが塔の先端が見えた。カイルがざっと見た感じではあるが、ここからそこまでまだ千メートル以上はありそうだ。

「まだまだ先は長いぞ。むしろここからが本番なんだから！」

「そうだね、メリナさん……」

「私、頑張るのですよ……」

カイルとアイスは手を取って互いに支え合いながら立ちあがった。メリナはそれを横目で見ると、ゆっくりと前を歩いて行く。三人はそうしてテラスの根元部分にある梯子のようなものところまで来た。それは少し上にある黒い金属製の扉とまで続いている。ざっとみて十メートルくらいの長さはありそうだ。それをゲーツがすでに上まで登っていて、三人が来るのを今か今かと待ちかまえている。

「早く来い、ここから入れるぞ」

「わかった。待ってろ、今すぐ登るからな」

カイルとアイスはメリナに従い、梯子をゆっくりと登り始めた。ときおり吹きつける冷たい風が、彼らの集中を乱す。眼下には薄い雲が広がっていて、この蒼の塔の途方もない高さをまざまざと見せつけるようだった。カイルたちはその景色に少し身震いしながらも、梯子をあがっていく。

そうして三分ほどをかけてカイルたちは梯子を登り切った。上ですすでに扉が開けられていて、メリナとゲーツが中で待っている。その待ちくたびれたような様子に、カイルとアイスは急いで扉の中へと入った。

塔の中は照明らしい照明がなかった。代わりに機械だろうか、ぼんやりと緑や赤の光を出しているものがある。壁は銀色に輝く金属でできていて、床もリリウムに似た材質で構成されていた。すでにできてから途方もない年月が経過しているのか、その上にはすべからく埃が堆積しているが。

「すごい……。この塔はやっぱり古代の遺跡か何かなのか？」

「ああ、大昔に酔狂な古代人が建てたらしいぜ。なんでも、マナが濃い地上では行えない研究を行うための研究施設だったとか。でも今じゃただのダンジョンだけだな」

「へえ……」

カイルは興味津津といった様子で塔の内部を見渡した。するとカイルのいる位置から少し前に進んだところに、こちらから差し込む

光を反射している扉があった。銀行の金庫扉のように頑強そうなその扉は、いかにも秘密か何かを守っているような感じがする。カイルは心のどこかに黒い嫌なものを感じたが、それに吸い寄せられるように近づいて行った。

「カイル、その扉は開かないぞ。階段はたぶんこつちにあるはずだ」

「わかったよ、今戻るから」

カイルは少々、名残おしそうにその扉から離れようとした。だがその時、彼の目に扉の脇についていた装置から赤い光が放たれる。光は彼の両目を正確に射抜いた。すると扉から、ピツという無機質な機械音が響く。同時に空気が抜けるような音がして、重いはずの分厚い金属製の扉がいやに静かに開いた。

「開いた！……うわああああア！！！！」

カイルの目の前に現れたのは陰湿な実験室のような部屋だった。広いその部屋の奥には蛍光グリーンの液体で満たされた巨大な水槽がある。水族館でメインを張っていてもおかしくないくらいの大きさのだ。それは分厚い扉によって外気から守られていたのか、中の液体も水槽自体も完璧に澄み切っている。それが今回は災いした。カイルが見たくない物を鮮明に見せる結果となってしまったのだから。

それは人間だった。無数の人間が宙に浮くようにして水槽を漂っている。それぞれまったく同じ顔、同じ体格。髪の毛の長さまでも寸分たがわず同じ。同一人物としか思えない人間がそこには無数に存在していた。彼らはみな白目をむいていて、おぞましい形相をしている。まさに悪魔崇拜者の行うサバトのごとき惨状だ。

しかも、厄介なことにカイルはその人間の顔に見覚えがあった。彼のよく知っている人間だったのだ。いや、アルカディアをプレイしていた人間ならばほとんど誰でも知っているような人物だと言っているだろう。何せ、数億人のプレイヤー人口がいるとされたアルカディアでも最も有名な人物だったのだから。

ここにいる人間たち、いやそれを模した「何か」は醜悪でなおかつ恐怖すべきことに、アルカディアで最高のプレイヤースキルを持つといわれた男「アーガス」とまったく変わらない容姿をしていたのだ――。

第十一話 塔に秘められしもの（後書き）

ようやく序章が終わり、本格的に話が進み出したというところでしょうか

ですので、これからも「青輝のラジエル」をよろしくお願いします

第十二話 始祖再生計画（前書き）

今回はどシリアスです。ご注意ください！

第十二話 始祖再生計画

不気味に輝く緑の液体の中を泡が上る。その泡につつまれてゆたうのは無数の人体。筋骨隆々としてその身の丈は二メートルほどもあるうか。肌は浅黒く鋼のような光に満ちていて、顔は彫が深く頬に傷がある。歴戦の戦士という言葉はこの男のためにあるかと思えるほど風格のある男だった。

それをカイルは茫然と見つめていた。彼の心に浮かぶのは黒い何か。形容しがたいがそれはとても不快で、嵐の海のように底知れぬ闇をはらんでいた。彼はそれに対してなんとも対処することができずに、ただ人形のように目の前の光景を見つめている。

カイルがそうしていると、その後ろで悲鳴が上がった。彼がゆらゆらと鈍い動作で振り向くと、彼の少し後ろでメリナたちが石化したように立ちつくしている。彼女たちはそのまま、目の前の光景に怯えているかのような不安定な歩き方でカイルの方までやってきた。メリナとゲーツははつとしたように目を丸くしながら、アイスはすぐるようにゲーツに顔を押しつけながら。

「これは一体……どうということなんだ」

「僕にもわからない……。メリナさんの方こそ、前にもこの塔に来たことあるんじゃないかった？」

「来たことはあるが、こんなものを見るのは初めてだ！　そもそもこんな悪趣味なものがあることを知っていたら、ギルドが入団試験に使っわけないだろ！」

「それもそうだよな……。とりあえず、これが何なのか調べよう。急いでとこだけど、ものすごく嫌な予感がするんだ。ゲーツさんとアイスも調べるのを手伝ってくれるよね？」

ゲーツとアイスは無言でこくこくと首を縦に振った。カイルはそれにうなずいて応えようと、不快感をこらえながら部屋を見渡す。水槽から発せられるかすかな光に照らされた部屋は大型のコンピュータのようなものと、資料のような物の入った棚で埋め尽くされていた。資料の方はビニールのような変わった材質でできていて、てらと水槽からの光を反射している。その一方でコンピュータの方は埃が積もっていて動くかどうかはきわめてあやしそうだ。

ひとまずカイルはコンピュータの方へ、メリナやゲーツは資料棚の方へと分散して調べることにした。四人はそれぞれの担当する場所へと、正面にある水槽から目をそらしながら器用に歩いて行く。そうしてゆっくりと四人がコンピュータの前と資料棚の前に着いた時、カイルは少し驚いたように息を飲んだ。

「地球と同じ……？」

コンピュータのキーボードにあたる部分が、驚いたことに地球製のものとは変わらなかった。しかも使われている言語までもがローマ字だ。アルカディアは国産VRMMOだった。なのでこの世界で使われている言語が日本語であることにはさほど驚かなかったカイルだが、この一致にはさすがにびっくりして一瞬だが動きが止まってしまう。しかし扱う分には好都合なので、彼は引っ掛かるものを感じながらもコンピュータの電源を入れた。

『システム起動。パスワードをどうぞ』

ボウツと黒いディスプレイに光が点った。すぐに青い画面とパスワードと書かれた空欄が映し出される。周辺にある武骨な機械がゆるい動作音を出して、あちこちにつけられていたランプが輝き始めた。カイルは驚くほど古いコンピュータが無事に起動したことに對して、おおつとばかりに感心する。しかしすぐにパスワードと書かれた空欄に現実を叩きつけられた。

「……困ったな。パスワードなんてわからないぞ。メリナさん、そ
ちの資料に何か番号とか変な記号の羅列みたいな書いてない？」
「私の読んだ資料には特に番号とか記号の羅列なんて書いてないな。
二人はどうだ？」

「俺のも書いてないな」

「私のもですよ。というか番号とか記号の羅列なんてなんに使う
んです？」

アイスはツインテールを揺らして首を斜めに傾けた。サファイア
ブルーの純真な瞳が、カイルを射抜く。カイルはそれに少し動揺し
たものの、彼女に笑って答えた。

「この機械を使うためには暗号みたいなものを打ち込む必要がある
んだ。だからそれが資料の中にないかと思って」

「へえ、カイルさんはその機械を使えるんですか。すごいです、そ
んな機械は王都の学者さんでも使えないのに」

「もといった土地にこれによく似た機械があつたんだ。だから学者じ
やないけど使えるんだよ」

「へえ、カイルさんのいたところって進んでるんですね……」

アイスは感心したように溜息をつく、また資料を開いて調べ物を始めた。カイルはそれを見ると、ふたたびディスプレイの前に視線を移して考え込み始める。しかしなかなか妙案は出てこなかった。

こういうパスワードの類は何回か間違えて打ち込むとシステム自体が駄目になることが多い。要は間違えることができないのだ。しかもパスワードに関することはほぼノーヒント。コンピュータの専門家でも何でもないカイルにははつきり言って頭を抱えることしかできない。だがそうして考えているだけでは仕方ないので、彼はごく低い確率に賭けてみることにした。

「こうなったら適当にやるしかないな。えーと、最初の数字は……」

カイルの指が気ままに「1」と書かれたキーを叩こうとした。しかしその瞬間、彼の指が止まる。そして彼の脳内に奇妙な声が響いてきた。それはどこかものさびしげな少女の声で、カイルはそれにひどく懐かしさを感じる。それは紛れもなく、この世界に来て最初の夜に出会った少女の声だった。カイルは驚いたように顔をあげて、彼女が来ているのかとあたりを見回す。

『私に任せて。私は本質的にコンピュータに関することなら専門なのよ』

「き、君はあの時の！」

『ふふふ……』

「あ、ちょっと！」

少女の声は不思議とよく通る笑いだけを残して消えていった。カイルはあわてた様子で叫ぶが、その声にメリナたちがおかしな顔をして振り向いたのですぐにデイスプレイへと視線を戻す。なぜ彼女がここで表れたのか、彼女とこの異様な光景は何か関係があるのかカイルには考えるべきことは山ほどあった。しかしこの場において一人で考え込むのは得策ではないだろう。彼が一人で考えたところで答えは浮かばぬだろうし、時間が過ぎるばかりだった。

そうしてカイルは不完全燃焼したような表情でデイスプレイを見下ろし始めた。すると、青い画面に白い稲光のようなノイズが走る。画面の下の方から数え切れぬほどの0と1からなる数字の塊が上がってきて、たちまちのうちに画面を占領していった。そうしてしばらくすると、今度は画面が暗転した。それを見るやいなやカイルは興奮したように画面にかじりつく。

「すごい、本当に助けてくれたんだ……」

暗転した黒い画面に、紋章が浮かび上がった。濁った血のような紅で、逆三角形の中心に目が描かれている。どこか呪術的なイメージを与える紋章だ。しかしカイルはそのようなことに頓着せず、わくわくしながらカーソルを移動させてその紋章をクリックする。するとガラスのように紋章が碎けるエフェクトのあとで、画面上部に大きく「記録：始祖再生計画」と表示された。

始祖再生計画と記されたタイトルのもとに無数の項目が現れて、それぞれ難解な言葉で自己主張をし始めた。そういった分野に強くはないカイルはその中でもっとも下にあった研究員手記と書かれている部分を選択する。それぐらいしかまだ十五歳の少年でしかない

彼には内容が理解できそうもなかったからだ。そのデータが問題なく画面に展開されたところを彼は確認すると、メリナたちの方に振り返った。

「みんな集まって！ 資料が見つかったよ」

「本当か、カイル？ というよりもほんとによくそんな機械が動かせたものだな。まるで古代人だ」

「ま、まあね……。それよりこれを見てよ、ここが何の施設だかわかるよ！」

カイルの言葉に、メリナやゲーツたちが三々五々集まってきた。

彼女たちはカイルの後ろに立つと、物珍しそうにコンピュータの画面を覗き込む。カイルはそうして全員がそろったところで画面をスクロールさせた。すると次々と画面に文字が現れる。さすがに長い時間が経過しているのどころどころデータが読み取れずエラーと表示されてしまっている箇所もあるが、おおむね読み取ることができる。メリナやカイル達はその画面にくぎ付けとなって資料を読んだ。

『三月七日 いよいよ始祖再生計画がスタートした。この計画には全人類の存亡がかかっているといっても過言ではない。この計画如何によつては始祖の代より悠久の時をかけて育まれた文明も灰燼に帰すであろう。我々の肩に人類の命運はかかっているのだ』

四月八日 素体にはアーガスを用いることが決定した。やはり最強の戦闘力を誇った始祖である彼ならば、やつらにも対抗できる可能性が高い。もし彼の再生が成功すれば我々は勝利に向けて一歩前進するだろう

七月五日 素体の培養はきわめて順調に進んでいる。だが、ここで大きな問題が発生した。肝心の魂が肉体に宿らぬのだ。魂が宿らぬ状態では始祖といえども我々と変わらない。これではあの忌々しい化け物どもにダメージを与えることはかなわないだろう……。やつらにダメージを与えるために必要なのは物理的パワーではなく始祖の魂が持つ高い存在階層の力なのだから。

八月十五日 状況はきわめて切迫してきている。もう八割がた地上は焼け野原だ。だが、われわれはやつらに対して有効な手段をほとんど見いだせていない。かろうじてわかっているのは連中が人類に対して強烈な敵意を持っていることと、連中には近代兵器が通用しないこと。さらに連中にダメージを与えるには始祖の魂に由来する高い存在階層の力が必要だということだけだ。まったく、世界中の学者が研究しているのにこれだけしかわからないとは、なんたるざまだろうか……

九月十一日 ついに始祖再生計画が大きく進展する研究成果が上がった。悔しいことにこの部門の成果ではないが、それはこの際構わないだろう。人類自身が滅んでしまっただけでは元も子もない。

成果を上げたのは魂を研究している部門だった。彼らの研究によればすでに絶命している大多数の短命種の始祖の魂は、並行宇宙間のはざまにある量子の海を漂っているらしい。彼らはそれをサルベージして、我々に運用できる兵器に加工しようというのだ。我々の偉大なる祖先に当たる始祖に対して畏れを知らぬ行動だとは思うが、私たちはそれを遂行するしかないだろう……。

十月二十一日 兵器の試作品が完成した。その兵器の名を我々は ERROR！ 表示不可！』

ここから先の記録はすべて破損してしまっていて表示することができなかった。しかしカイルに衝撃を与えるにはそれだけでも十分すぎた。彼は吐き気を催して思わず口に手を当てる。つま先から頭の先まで氷のように冷たい何かに覆われたような痛覚が、容赦なく彼に襲いかかっていた。彼は襲いかかる言いしれぬ不快感に前のめりになり、コンピュータによりかかる。その顔は血の気が引いていて、彼の感じている底知れぬ恐怖のようなものを如実に表していた。

始祖というのはおそらくアルカディアのプレイヤーたちのことだろう。彼らはカイルが来るよりはるか昔に、この世界へと来ていたのだ。そしてこの記録から判断すると、彼らが古代文明を築きあげたのだろう。このコンピュータの規格が地球によく似ていたのも、言語が日本語なのも彼らが築いた文明を基にしているとすれば筋が通る。なんら、無理のない仮説だった。

だがこの記録によると、古代文明は最終的に始祖を利用して兵器を造り上げたようだ。この文明を滅ぼそうとしている敵がなんであるにしろ、カイルには理解しがたかった。本能的に拒否している事柄とっていい。それどころか、彼の中ではそれは殺人以上に残忍を極めた行為に思えた。まさに血に飢えた悪魔のような所業に感じられたのだ。そう、道徳というものを一切排した狂気の行動に。

それを不快に思ったのはカイルだけではなかった。メリナたちも同様に険しい顔をしている。二人とも手記の内容をどれだけ理解できたのかはわからないが、目が先ほどまでとは違っていた。視線は氷となり、白眼には赤い血管が走り。拳も力が込められてわなわなとふるえていた。背中からは不穏なオーラのようなもので出ているように見える。それらが示しているのは激しい怒り以外の何物でもなかった。

アイスはその四人の中では比較的、平静を保っていた。単に書いてある内容が理解できなかったかもしれない。だがとにかくにも彼女だけがこの場で唯一、通常の状態をかるうじて保っていた。

「三人とも、何を書いてあったのか漢字があんまり読めない私にはわからないですけど、落ち着きましょう。それにそろそろ上に登らないと時間までに帰れないですよ!」

「……それもそうかもしれん……」

「ここはひとまず戻るしかないか……」

カイルたちは何とも言えない後味の悪さを感じながらも、この場はアイスに従った。彼らは鉛で足がでているかのような重苦しい歩調で部屋から出ていく。そして大きく大きく深呼吸をすると、また塔の最上階を目指して一歩ずつだが歩き出した。それまでとはどこか違う、悲しげな足音を塔に響かせながら――

第十三話 到達、最上階

埃の降り積もった階段と通路。その淀んだ空気の中をカイルたちが走り抜けていく。その後ろから彼らをたくさん機械兵が追いかけていた。彼らはいずれも甲冑を来た騎士のような姿をしていて、ぎしぎしと床を鳴らしながら執拗にカイル達に攻撃を仕掛けている。あるものは腕に備え付けられた光線銃を撃ち放ち、あるものは光で構成された輝く剣を振りまわし。機械兵は耳障りな金属音を響かせながら、ありとあらゆる手段で持つてカイル達を殲滅せんとしていた。

カイル達はその攻撃の嵐をかくぐりながら塔の上を目指して廊下を疾走していた。時折、四人のうち誰かが後ろを振り向いては機械兵たちを足止めするために呪文や斬撃を放つ。炎の刃が一閃して前方を走っていた機械兵が斬られたかと思うと、次の瞬間には雷鳴のような炸裂音が轟いて鉄くずが飛び散った。その猛攻にたくさんいた機械兵も次々と数を減らして、嵐のようだった攻撃も少しずつ間が開いていく。そうして攻撃がゆるくなってきたところで、とどめとばかりにカイルの呪文が炸裂した。

「……貫け！ サンダーレイ！」

カイルの杖の先から稲妻がほとばしった。拡散した青い光はカイルから少し離れた点で収束して、一直線に機械兵たちを貫いていく。機械兵たちの装甲を白い網目状の電撃が走り抜けた。あちこちで無数の爆発が連続して、塔が揺れるほどの衝撃があたりを包む。太鼓のリズムのようにいつそ心地よいぐらいの勢いで機械兵たちの頑強な体が弾け飛んでいった。そのあとには黒く焦げた廊下とクズ鉄となった機械兵の山だけが残される。

カイル達はスクラップになり果てた機械兵たちを見て、駆けていた足をとめた。彼らは額の汗を拭いてほっと一息つく、近くの壁に寄り掛かる。そして、少々うんざりしたような顔をした。

「やれやれ、とんでもない数だったな。こんな狭い塔の中によくこれだけモンスターがいたものだぜ」

「こいつらは機械だからな、食べ物がいらなからどれだけでも居られるんだろ。まあ、それにしても以前に登った時より数が多い……」

「ほんとに多すぎですよ。私、疲れちゃいました……」

頬を赤く染めたアイスは床にぺたりと座りこんだ。彼女は猫背気味に顔をうつむけにすると、はあはあと荒い呼吸をする。ゲーツはそれを見て肩をすくめると、メリナやカイルのいる方に顔を向けた。その時、彼は両手を困ったなといわんばかりに上げていた。

「アイスはもう限界が近いな。今日のところはこのあたりで休んだ方がいいかもしれん」

「うーん、どうするカイル？　ここで休んでも明日の朝は早めに出れば十分間に合うが……」

「ちょっと待って……」

カイルは近くにあった窓から外を見た。外はすでに夕方になっていて、眼下に広がる雲海が紅に燃えている。太陽は山の端に沈みかけていて、最後とばかりに萌黄色の光を投げかけていた。塔の青い

外壁はその光を目いっぱい反射してまばゆいばかりに輝き、その根元部分はすでに暗闇の下にある。カイルはそれを確認すると再び塔の中へと視線を戻した。そして彼はメリナに向かってしつかりとうなずいて応える。

「もう夜になるみたいだ。…よし、もう少しだけキリのいいところまで登ったら休もう」

「わかった、じゃあもう少しだけな」

カイル達は互いにうなずくと、体をよくほぐした。彼らはそうしてまた塔を登り始める。すると、先ほど動きを止めたところから二階ほど上に上がったところで、彼らは小さな扉を見つけた。その薄っぺらい金属製の扉を注意深くカイルは開ける。長年使われていなかったためか悲鳴のような摩擦音と大量の埃を撒き散らしながら扉は開いた。

扉の中には何もなかった。金属の壁が打ちっぱなしの、殺風景な小部屋があるだけだ。その部屋の中にはつぶれて完全にスクラップになっている何かの機械らしきものだけがあり、そのほかには何もない。ちょうど、四人で休憩するには良い部屋だ。

「おつ、ちょうどいい部屋だ。今日はここで休憩しよう、みんなそれでいいよな？」

「ああ、私は賛成だ」

「俺もだぜ」

「どこでもいいですから休憩したいですう……」

満場一致だったので、四人は早速部屋に入った。彼らはそのままカバンから寝袋など泊まるための装備を取り出して野営の準備をする。そうしてそこからは何事もなく時間は流れ、彼らは交代で寝ずの番を務めながらもひとまず眠りについた――。

真夜中。月が天頂で真円を描き、淡い白雪のような光を投げかけている。それは塔の巨大な窓を抜け、開け放たれた扉からカイルの頬を照らしていた。カイルはそれを瞼を通してかすかに感じると、目をこすりながら体を起こす。するとそこには横顔を白く染めたメリナの姿があった。彼女は戦闘用の装甲を身に付けた状態で、剣に寄り掛かって座っている。その目は穏やかながらも研ぎ澄まされていて、敵の来襲に備えているかのようだった。しかしその視線は起き上ったカイルの姿を見つけた途端、やわらかなものへと性質を一変させる。

「なんだカイル、眠れないのか？」

「いやさ、なんだか胸騒ぎがして」

「ほう、そうか。確かに今の蒼の塔は様子がおかしいからな。ギルドの新入りが変なからくりを動かしてから様子がおかしくなっていたそうだが、まさかここまでとは想定外だった」

「前はもっとモンスターとかは少なかったのか？」

「ああ、今の半分以下だったな」

メリナは過去を思い出しているのか、少し遠い目をしていった。蒼い瞳が月明かりを反射して透き通る。紅の鎧もまた昼間とは一味

違う燐光に満ちている。カイルはそんな幻想的なメリナの様子を見て、にわかに感傷的な気分になる。彼もまた、物憂げな瞳で空に浮かんでいる円い月を眺め始めた。空の高いところにいるためか空気は澄み切っていて、ガラスのよう。煌々と照る月はその冷たい輝きを一切遮られることなくカイル達に伝えてきていた。

二人の間に満ちる雰囲気包み込むような優しいものになった。それにつられるかのように、メリナは顔にほほ笑みを浮かべる。カイルもそれに応えるかのように笑ったところで、メリナがうつすらと薄い唇のよい唇を開いた。

「カイル、お前が来てからまだ一週間にもなっていない。なのに、こうしていると昔から一緒だったような気がするのなぜだろう……」

「いろいろなことがあったからじゃないかな。こうして旅したり、サンドフォームを倒したりとかいろいろやってるもの」

「そういうことじゃなくて……私が言いたいのはもっと根本的な……」

メリナが少し怒ったような顔をしてカイルの方を見たその時、床が大きく揺れた。四人のいる部屋からはるか下の階層から、耳をつんざくような爆裂音と大地震のような激しい揺れが伝わってくる。その轟く爆音と強烈な揺れの中、メリナは剣を構えて敵襲に備え、カイルはいまだしぶとく寝ているゲーツとアイスを起こしにかかる。

「なんだ、なんかやばい奴でも来るのか？」

「まだ寝足りないですよ……」

「いいから二人とも、さっさと戦うための準備をして！」

カイルがのどが張り裂けんばかりの勢いで怒鳴ると、二人はあわてた様子で魔導書を取り出した。二人は早口で呪文を唱えると、瞬く間に戦闘用の装甲であるクレセリヲ・フレームに身を包む。しかしそうしてカイル達が戦う準備を整えると、爆発音や床の揺れはぴたりと絶えてしまった。四人は互いに背中を合わせながら、嵐の前の静けさのような不気味な静寂に満ちた部屋をしっかりと見渡す。彼らの目はいずれもかすかな部屋の变化をも見逃すまいと鋭敏になっていた。

そうして数分の時が過ぎた。だが、待てど暮らせど敵は来ない。カイル達は額から滴った汗をぬぐうと、ふっと大きく息をした。彼らは構えを維持したままではあるが、背中あわせになっていたのをやめて互いに顔を見合わせる。

「来ないな……。間違はなく何か起きたはずなのに……」

「仕方ねえな、とりあえず上まで登っちまおうぜ。まさかまた眠り直すわけにも行かねえからな。それで、さっさとこんな塔からおさらばしちまうのが一番さ」

「ゲーツさんの言うとおりなのですよ。あんな不気味な装置もありましたし、こんな塔からはさっさと出たいのです！」

「ここはゲーツさんとアイスの言うことに従った方がよさそうだね」

カイルは首を大きく縦に振ると、荷物をまとめ始めた。メリナたち三人もそれに続いて、四人は手早く出発の準備を整える。予定よ

りも数時間早く睡眠もまだ十分とは言えなかったが、こうしてカイル達は部屋を飛び出した。彼らは夜の深い闇に閉ざされた塔の中を、手に持ったランプと月明かりの淡い光だけを頼りに突き進んでいく。その足取りは速く、姿を見せぬ何者かにせかされているようだった。

気味の悪いことに、四人の前には昼間のように敵が立ちふさがることとはなかった。その代わり、はるか階下から金属を砕くような音だけが時折響いてくる。巨大な怪物がバリバリと獲物をかみ砕いているかのようなその音は、カイル達の走りをより一層加速させた。彼ら四人はろくすっぽ休みもせず最上階目指してひたすら走っていく。

そうしてしばらく時間がたつと、とうとう夜が白み始めた。はるか東の果てから燃える太陽が顔をのぞかせて、闇に沈む空や大地を燦々と赤く染め上げていく。カイル達の下に広がる雲海はたなびく紅の絨毯のようになり、それに反射されたまばゆいばかりの光がカイル達の目を射抜く。

カイル達はその光に一瞬だけ薄目になったが、構わず走り続けた。しかし、その終わりがなくのように思えた階段登りもついに終わりがやって来た。カイル達の視界がにわかに広がり、神殿のような空間が目に見え込んでくる。乳白色の石でできた円柱と重厚な天井からなる空間は、すり鉢状に落ちくぼんでいた。そのすり鉢の縁にあたる部分からは朝日に輝く空が見えていて、ここから上がるための階段の姿はどこにも見当たらない。その代わりにカイル達からくぼんだ床を挟んだ向こう側に、祭壇のようなものが見えた。その中には陽光をはらんで煌々と蒼く輝く、しずく型の宝石が満載されていた。

「ついたぞ！ 最上階だ！」

「あれが試練の宝石？ よーし、さっさと取って帰ろう！」

カイルは祭壇に向かって一気に駆け出そうとした。だがその時、塔が爆発によってにわかに揺さぶられる。バランスを崩したカイルは、その場でしりもちをついてしまった。そうしている間にも彼の座り込んでしまった床は激しく揺れる。その揺れはだんだんと小刻みになっていき、とうとう頑強なはずの石でできた床にも亀裂が入り始めた。

「まずい、床が裂けるぞ！」

メリナがそう叫ぶと同時に、床が中央部から一気に裂けた。その深い裂け目の中から、轟き渡る爆音とともに何かが飛び出してくる。その後に続いて無数の瓦礫や砂埃が間欠泉よろしく噴出した。勢いよく舞い上がったそれらは天井を直撃してあたりにもうもうと立ち込める。やがてその中から、巨大な人型の影が姿を現した。カイル達は柱の陰に隠れながらも、その恐るべき姿を確認する。

ぬらりと血に濡れたような黒い装甲に、顔に当たる部分から突き出した鋭利な牙のような物。その紅の目は獲物を求める死神のように冷酷な光に満ちていて、いやに細いが殺戮に特化したような鋭角なフォルムをもつ四肢は凶悪な力にあふれている。全体として線が細い容貌ではあったが、それはひよろひよろとしているというよりは無駄なものを排除したといった雰囲気だ。さらにその華奢だが威圧的な骨格の肩には「ADAM T-01」という文字が白で鮮やかに書かれている。

怪物はその紅の目でもってあたりを見回した。圧迫するような視線が宙を走り抜けて、カイル達はその圧倒的な気配に思わず後ずさ

る。だが、その破滅的な目はある一点を見据えて動きを止めた。それはなんとカイルのいる場所だ。怪物はカイルの姿を視界にとらえると、彼の体を上から下まで執拗なまでに注意深く観察する。そしてその視線が元の位置に戻った時、音量は小さいがおぞましい内容の音声が空気を伝わってきた。

「……アストラルパターン、E因子ヲ確認。咎人ト認定、殲滅セヨ」

第十四話 決戦、機械兵

黒い死神のような雰囲気の化け物じみた機械兵。その紅の単眼がカイルの姿を見据えると、強靱な足が床を蹴った。ドンと響き渡る音とともにその黒い体躯が風を裂いてカイルの方へと跳ぶ。疾走する影のようなそれは瞬く間にカイルへと距離を詰めて、手より生える長く曲がった爪が首を刎ねるべく光る。カイルはとっさに杖を顔の前に構えてその一撃に備える。カイルの顔をツウと冷たい汗が流れ落ちて、その瞼が一瞬だが閉じられた。

だが、衝撃は襲ってこずにかわって鈍い金属音がカイルの耳を貫いた。それに遅れて「グハッ……」と呻くような声も聞こえてくる。それに驚いたカイルが瞼を開くと、メリナの身体が宙を飛んでいた。彼女はそのまま宙を舞いながらもどうにか空中で姿勢を立て直し、床へと着地する。足に装着されている紅い金属製のブーツは床の石との間で火花を散らして、白い筋が床に刻まれる。彼女の身体はそうして床を削りながらも数メートル滑走して、縁の盛り上がった部分にぶつかり停止した。メリナはそうして身体が止まると、機械兵を鬼のような形相で睨みつける。その目は血走っていて、地獄の炎をたぎらせているようだ

「おい、化け物！ お前の相手は私だ！」

「……」

機械兵はゆらりとメリナの方を向いた。そしてその足をゆつくりと彼女の方へと歩ませる。メリナは迫りくる死神の足音を前に、カイル達の方を見た。彼女とカイルの視線が重なり、言葉を介することなく意思が伝わる。メリナの言わんとしていることを察知した力

イルは杖を構えると、機械兵の様子を注意深く観察した。

カイルがざっと見たかぎり恐ろしいほどの威圧感などからして、機械兵のレベルは推定で三百以上。しかもその速さから言うと、近接戦闘に特化しているようだ。カイルが一番相手にしたくないタイプの敵である。しかもその装甲は床を貫いてやってきたにもかかわらず、傷一つついてはいない。相当頑丈で硬い合金が使われているようだ。

人間でも機械でもそうだが、内側は脆い。この外側に存在する装甲を貫くことができればカイルは勝てるだろう。だが、この黒い装甲は貫くためには大魔法が必須と思われた。しかも、純粋なエネルギーを一点に集中させることができるようなタイプの魔法が望ましい。そう考えたカイルは心の中で、メギド・ジハードを撃つしかないと考えた。逆に、メギド・ジハードが効かないとなればカイルに打つ手はないだろうとも。

メギド・ジハードは現在保有しているMPの半分を消費して撃つ魔法だ。そしてその威力は消費したMPの量に比例する。カイルは機械兵とメリナの姿を見比べると、素早く呪文を唱え始めた。機械なので牽制をしても心理的效果も見込めないし、MPをそれなりに消費する拘束魔法はメギド・ジハードの威力を下げてしまう。また、妨害魔法で機械兵の動きが多少鈍ったところで、レベル差的にメリナが稼げる時間は変わらないだろう。カイルが呪文を唱え始めたのはそう考えた末の結論だった。

そうして呪文を唱え始めたカイルの姿を確認したメリナはやわらかにほほ笑むと、機械兵に向かって一気に飛び出す。ブーツと床がこすれ合い火花を散らしながら、メリナの身体が音を超えそうな加速を得た。彼女は走りながら剣を機械兵に向かって構えると渾身の

叫びをあげる。

「いっけええ！ 紅蓮一刀斬！」

機械兵に向かって紅い斬撃が放たれた。剣は一筋の紅い光となつて大気を裂きながら、機械兵の身体めがけてふるわれた。その紅い光は見事に機械兵の首筋に直撃して、鈍い衝撃波が付近を揺らす。その場に残されていた砂埃が機械兵を中心に円形に沸き立って、メリナと機械兵はにわかに砂のベールに包まれた。その中でメリナはニヤツと顔を緩めた。心地よい確かな手ごたえが、彼女の腕には残っていた。

しかしその直後。彼女の目は急激に見開かれていった。その顔は青ざめて、息を吸い込む呼吸音がいやに大きく聞こえる。機械兵はメリナの攻撃を首筋にまともに受けたにも関わらず、平然と立っていた。ほんのわずかな身体ブレ一つなくだ。その紅い目がわずかに動いたかと思うと、メリナに対して挑発的な輝きを放つ。

メリナの中では先ほどの攻撃は最高に位置付けられてもよいほどのものだった。竜でも斬り伏せられるであろうほどの一撃のはずだった。しかし、どうしたことだかメリナの前に立つ機械兵は平然として彼女に対して挑発までしている。メリナは顔をゆがめて歯を食いしばった。奥歯がギシツと嫌な音を奏でて、手のひらには血管が浮かび上がる。

「化け物め……。おのれええッ！」

メリナの姿がにわかに霞んだ。彼女はその直後、機械兵の前に現れると猛然と剣を繰り出す。一つのはずの剣が残像によって無数に増えたように見え、火花が滝のような勢いで床へと注がれる。金属

音が無秩序に連続して、刃が空を散り散りに引き裂く音が響き渡る。まさに神業的な速度の連撃。防ぐ手段はおよそないかのように思えるほどだ。

しかし、機械兵はその攻撃を片手でいなしていた。刹那の間に数十と繰り出される剣戟を、軽い調子で捌ききっている。さらにその足は退屈そうに組まれていて、時折ポンポンと床を叩いていた。メリナはその態度が頭にきているのかさらに攻撃の速度を上げていく。彼女の視界の端に映し出される緑のゲージはぐんぐんと上昇して、百五十という地点にまで到達しようとしていた。されど機械兵は相も変わらず、その攻撃を時にはかわし時には腕で受け止めてなどといともたやすくやり過ごしていく。

メリナから少し離れた窪地の縁付近でカイル達はその攻防を驚愕をもって見ていた。とくにアイスはその大きな目を裂けそうなほど見開き、顔を蒼白にしている。彼女は脇に立っているゲーツの方を向くと、紫になりかけている唇を勢いよく開けた。

「ゲーツさん、このままじゃメリナさんが……！」

「負けるな……」

「わかってるならどうして助けないんですか！」

ゲーツはそつと後ろを振り向いた。そこには目を閉じて集中した状態にあるカイルがいた。彼は杖を床につきたてて、額に皺をよせながら必死で呪文を唱えている。唇は擦り切れそうなほどの速さで動いていて、舌は今にも絡まってしまいそうなほどの速さで言葉を刻む。ゲーツはそんな様子のカイルをそつと手で示すと、アイスの顔を見た。

「呪文を唱えている間、カイルは無防備だ。だから俺たちはここでカイルを守らねばならん。カイルの呪文でなければおそらくやつにダメージを与えるのは無理だろうからな……」

「だからってメリナさんを放っておいてもいいわけじゃないです！ わかりました、私一人でもメリナさんを助けに行きます！」

「おい、アイス待つんだ！ あれはお前が行ったところでどうになる相手じゃないぞ！」

ゲーツはアイスの服を後ろからひつつかんだ。アイスは鋭いまなざしで彼の顔を睨みつけるものの、ゲーツはその手を離さない。ゲーツとアイスの間に静かな火花が散った。二人は服が破れるか破れないかの間で互いに微妙な力加減で引つ張りあう。だがその時、メリナのいる方角からキンと鋼を裂いたような音が轟いてきた。

「馬鹿な……！」

メリナの剣が機械兵の親指と人差し指で完全に受け止められている。剣は地割れにでも差し込んだように、まったく動かなくなってしまうっている。彼女は頭から湯気でも出そうなほど顔を紅くして、腕に力をこめるもののそれは同じことだった。だがそれでもメリナは剣士であるがゆえに剣をあきらめることができずに、どうにか指から引き抜こうと苦心する。そのとき、メリナの剣を抑えつけていた指が唐突に開いた。それと同時に、彼女の腹めがけて黒い弾丸のような一撃が放たれる。

「グオハア……！」

メリナの身体が宙を突っ切った。彼女はそのまま闇くに堪えない悲鳴と、風を切るヒュウという音を響かせながら最上階の縁にある盛り上がった部分に直撃する。彼女の身体を中心に円いクレーターが形成され、塔が崩れんばかりに揺らいだのは、機械兵の一撃のすさまじい衝撃を何より雄弁に物語っていた。

機械兵はゆっくりとあたりを見回すと、倒れてしまっただけ動かないメリナの方へと歩み寄っていった。金属の足が織りなす鈍く重苦しい足音を響かせながら、その黒い身体は徐々にメリナへと迫っていく。そうして機械兵はメリナのすぐ真横まで来ると、容赦なくその鋼の足を彼女の背中へと振り下ろした。

「ウグツ！ ドハア！」

足が振り下ろされるたび、メリナの身体はのけぞってその口から嗚咽が漏れた。口からは少しずつだが血があふれて、白い石からなる床に一筋紅い筋をつくる。その女性らしからぬその悲痛なうめき声は、容赦なくカイルやゲーツの元まで響き渡ってきた。三人はいずれも怒りに身体を震わせて、目から殺気がほとばしっている。とくにゲーツはその握りしめた拳がすでに鮮血でぬれるほどだった。拳に力が入りすぎているのだ。

「くそっ……もう見てはおれんぞオオオ！　アイス、ここは任せた！　俺はやつを止めてくる！」

「ゲ、ゲーツさん！　私も行きます！」

「ダメだ！　お前はここで待っている！」

ゲーツは近寄ってきたアイスを押し返すと、単騎で機械兵に突入

していった。彼は巨大な銃を機械兵に向かって構えると、メリナにあたらないように気を付けながらも走りながら撃つ。その光弾は機械兵の背中に見事直撃し、機械兵の注意がメリナからゲーツへとそれた。

「こつちだ！ さあ来い！」

ゲーツは銃を乱射しながら巧みに機械兵を誘導した。機械兵はメリナからすぐに離れると、ゲーツを追いかける。迫りくる光弾を弾き飛ばしながら、機械兵はただ淡々とゲーツを追いかけていった。ゲーツはそれを見ると、予想通りとばかりに笑う。

「いいぞ、その調子だ！ 俺を捕まえて見せる！」

ゲーツは銃を撃つ角度などを細かく調整しながら機械兵を翻弄し続けた。柱をまわり、盛り上がった壁の縁を走り抜けて彼はどこまでも逃げていく。その目は時折、カイル達の方へ向けられては細められた。カイルの呪文がなかなか完成しないのだ。彼は少ししじれながらも機械兵につかまらないように速度を保ち続ける。しかしその時、彼の視線から機械兵が消えた。とっさに彼があたりを見回してみると、機械兵はすでに彼の後ろに回り込んでいた――

「なに！ 見えなかった……」

ゲーツはそれきり沈黙した。彼の腹には機械兵の文字通りの鉄拳が深くめり込んでいる。機械兵は力を失って寄り掛かってきたゲーツをうつとおしげに振り払うと、カイル達へカツカツと足音を響かせながら近づいて行った。それを目にしたカイルは額に血管を幾筋も浮かべて杖を握りしめ、アイスは蒼白な顔をして言葉を失う。

「ゲ、ゲーツさん……。ゆ、許さない！」

アイスはその手に杖を構え、怒り以外の感情を忘れた冷徹な目で機械兵を見据えた。そのまま彼女は怒りに身を任せて、普段の愛らしい春風のような声とは正反対の背筋が凍てつくほど冷たい声で呪文を紡ぎ出す。

「……アイス・ジャベリン！」

アイスの掛け声とともに、杖の先端部に無数の氷塊が現れる。手のひらほどの大きさのそれらは一瞬にして凶悪なまでの加速を得ると、空を貫いて機械兵へ迫る。冷たい嵐のような勢いでそれらは次々と付近の床や天井を穿ち、大きな穴を無数に開けた。弾幕といつてよいほどの濃密な密度のその攻撃は延々と続き、付近は凍える破壊の場へと姿を変えていく。白い床や天井はたちまち瓦礫となつていき、もうもうたる白い冷気や砂埃があたりに満ちた。

ただ、その嵐の中でも不気味な足音だけは変わらぬリズムで刻まれていた。そして、それはアイスの魔法が終了するのと同時に床を破壊するかのような衝撃音へと姿を変える。白い空気は一瞬のうちになぎ払われ、迫る黒い死神の姿が鮮明に表れた。アイスは顔を石化させると、なすすべもなくその凶悪な腕に吹き飛ばされていく。彼女は縮こまってしまった固い身体のまま、轟音とともに近くの壁へとめり込んでいった。

もはやカイルを守るものはいなくなった。彼が紡いでいる呪文もまだ、完成まであと少しかかる。いくらレベル五百のカイルといえどもしよせん魔法職、この化け物の攻撃を受ければダメージは免れないだろう。まして、近接戦闘にめっばう弱い彼が戦うことなどできょうもない。アルカディアにおいて魔法職は砲台のようなものだ、

それ単体ではあまり強くはないのである。カイルがレベル五百にまで強くなったところでそれは砲台としての威力が上がっただけで、弱点を克服できたというわけではない。

しかしそんな状況の中で、カイルは絶望したりしてはいなかった。彼の心は絶望の代わりに宵闇のような黒さを含んだ怒りで支配されていたのだ。心が一部の隙もなく怒りによって埋め尽くされ、ほかの感情が完全に消失したような状態になっているのである。それはある意味で雑念をなくした究極の純粹状態といってもいいかもしれない。それぐらい、今のカイルは怒っていた。

カイルは機械兵へと一步近づいた。機械兵は近づいてくる彼がどこか興味深いのか、見つめるばかりで手出しはしない。そうしているうちにカイルは無機質な、ある意味死んだような目で機械兵の黒い身体を見渡す。その漆黒に輝き身体にはところどころに血が付いていた。ほかでもない、彼の仲間たちの流した血だ。その鮮やかに残った紅い痕が、カイルの怒りをより一層純化させ、高い次元のものへと押し上げる。

カイルの意識がとうとうあやふやなものとなってきた。怒りのあまり我を忘れるというが、今のカイルは本当に自我をなくそうとしているのだ。それと同時に、何か身体の奥底から何か底知れないものがわきあがってくる。不定形のように感じられるそれはとても熱く、莫大な力を感じさせた。カイルはその持つ力に歓喜して、すぐさま受け入れようとする。しかしそのとき、頭に冷たい少女の声が響いてきた。

「まだその力を手にしてはいけない。もしもいまの状態で覚醒すれば、エデンのものより丈夫なアルカディアの器といえど壊れてしまいかねないわ……。もし器が壊れてしまったら、あなたはヒトに戻

れなくなる』

「戻れなくなっただけいいよ……。僕には力が必要なんだ」

カイルは小声でつぶやくと、少女の声を一蹴した。彼はもはや迷うことなく心の中に現れた熱い力の塊を取り込もうと意識する。すると、力の塊は彼の中へと溶け込んでいき、カイルの身体全体が炎に包まれたような感覚に襲われた。彼の身体からにわかには衝撃波のようなものが放たれて、景色が歪む。機械兵はそのカイルの変化を感知するやいなや、悲鳴のような警報音を発した。

「E因子急速増大！ 熾天使レベルマデ到達！」

カイルの変化はなおも続いた。現実の姿に合わせて黒かった瞳は紅く染まり始めて、黒髪も逆立って青い稲妻を帯びる。さらに彼の着ているローブの背中部分がにわかには膨らみ始めた。むくむくと異様なまでの膨張を見せるそれは、やがて頑強な生地の限界をも超えてローブの背中部分に大きな穴を開けてしまう。その穴からは太陽のような輝きが放たれた。強烈な光は雲の隙間から差し込む陽光のごとく一直線に伸びて、あたりを照らし出す。それはだんだんと勢いを増していき、同時にそれを発しているものの姿も明らかになっていった。それは光の結晶からなる羽だった。そう、六枚の光の羽がカイルの背中から生えたのだ――

第十五話 始祖咆哮（前書き）

いよいよカイルが大暴走します

第十五話 始祖咆哮

「ウオオオオオ！！」

カイルは身体をそらせると、天に向かって咆哮した。塔が揺れ、付近の雲海がざわめく。彼の足もとを深い亀裂が走り、強烈な衝撃波が円形に放たれる。周囲の柱や床は碎けて飛ばされていた。無数の石の塊が舞い上がり、まだ紅く燃える朝の空へと消えていく。天井はすでにほとんど吹き飛ばされていて、それを遮るものは一切なかった。

機械兵はそんなただならぬカイルの様子に何歩か後ろへと下がった。そして何度か足踏みして足場がしっかりしていることを確認すると、カイルの姿を紅い単眼でもって睨みつける。機械兵はその強靱な文字通り鋼の足を屈伸すると、猛然と床を蹴った。その黒い身体が大気を吹き飛ばすような勢いで空を跳び、一瞬でカイルへと迫る。その速度たるやまさに神速。さながら機械兵から黒い影が勢いよく伸びたかのような情景だ。

「……ククッ」

ドンという衝撃波をも伴っていた機械兵の拳は、至極あつさりとカイルにつかまれた。機械兵は一瞬停止したがその後、なんとかカイルを振り払おうと床を揺さぶるような勢いで暴れる。が、カイルはまったく動じない。文字通り、一寸たりともである。その時のカイルはどこまでも無表情で、何かに失望したような空虚な目をしていた。彼はそのままどこかつまらなさそうに笑うと、一気に腕に力を込める。

鋼が悲鳴とともにきしむ。岩を砕いても傷一つ付かない機械兵の拳は薄っぺらな紙で出来ているかのように脆くも歪んでいく。それと同時に装甲に包まれた内部から、黒みがかった紅い液体が噴出した。手をつぶされた機械兵は機械らしからぬ醜悪でなおかつ耳を破壊するかのような音量で雄たけびを上げる。カイルはその様子を少しだけ、面白そうな顔をして見ていた。

「クククッ」

カイルはおよそ理性の感じられない獣のような目をして吐息をもらした。機械兵はカイルから距離を取るべく、後ろに向かって跳ぶ。カイルは遠ざかった機械兵にゆっくりと歩いて近づいた。決して走ったりはせずに、ゆっくりと。その顔には残忍にして壮絶な笑みが浮かべられていて、口元は不気味にゆがめられている。強者が弱者をいたぶるときのような、まさにそういう顔をカイルはしていた。

機械兵は血の滴る手を上に突き出した。その口から苦しげに呻くような声が発せられる。すると、肉が潰れるような音とともに腕の先端部が盛り上がっていった。紅い血にまみれた肉塊がむくむくと手の形をかたどっていき、やけどしたようにケロイド状の白い皮膚がその肉を覆い隠していく。ものの十秒ほどで機械兵の腕に、赤ん坊のようにぷにぷにとしてはいたが手が再生されてしまった。カイルはその一連の機械兵の様子に少々感心したような顔をする。

「……フフッ」

カイルはさきほどよりもさらに残忍な笑みを浮かべると、一息で機械兵までの距離を詰めようとした。だが機械兵はその動きに素早く対応し、足から炎を吹き出しながら後ろへとすべるように逃げに行った。機械兵はそうしてカイルの攻撃をかるうじてかわすと、先

ほど再生した手とは違う手をカイルに向ける。その手の甲にあたる部分についていた銃が変形して、黒光りする銃口が現れる。刹那、無数の青白い光が幾条もの筋を描きながらカイルに向かって走った。空気が焦げる特有の匂いがして、カイルの身体はたちまち光に覆われる。機械兵の執拗な攻撃はカイルの全身が燃えているかのような状態になっても続けられ、あたりに轟音が轟き渡った。

しばらくして、機械兵はもういいだろうとばかりに攻撃をやめた。あたりから音が消えて、深い静寂に包まれる。もうもうとした砂煙がゆつくりと対流して、かすかな風がそよぐばかりだ。天の上にある蒼の塔の最上階は、本来はほとんど無音の空間なのである。機械兵はその無音の空間にわづかばかりの足音を響かせると、カイルがいた場所に向かって歩く。しかしその時、周りの空気の流れがにわかに変わった。

「グウアアアアア……！」

咆哮が天を貫き、雲を引き裂いて周囲を揺さぶる。対するものの存在そのものを吹き飛ばすかのごときその叫びは、神が放った雷のように塔を激しく揺さぶった。カイルの身から放出される圧倒的な力に彼の周りの空気はすべて跳ねのけられてしまい、鉄の塊がぶつかってきたような衝撃が機械兵を襲う。その細いが重いはずの金属装甲に覆われた身体はなすすべもなく宙を突っ切り、塔の外へと放り出された。

「うつつ……」

すり鉢状になっている最上階の縁の方で、倒れていたメリナがかすかに呻いた。彼女はまだ少し揺れている床を震える手でとらえて、なんとか上半身を持ち上げる。途中なんども床へ崩れ落ちてしまっ

たものの、彼女はそのまま立ち上がることに成功した。剣を杖代わりにして、彼女はいまだにふわふわとして力の入らない身体をどうにかこうにか際どいバランスで支える。

そうして立ち上がったメリナの視界に、吹き飛ばされていく機械兵の姿が飛び込んできた。彼女は啞然とした表情で、空の果てへと一直線に消えていくその黒い姿を見送る。彼女の額を冷たい汗が滴り落ちて、背筋がにわかにかたまった。メリナはより白みを増した不健康そうな顔であたりをずっと見渡すと、機械兵を吹き飛ばした張本人であるカイルの姿を発見する。

黒から紅へと変化している瞳の色、逆立ち稲妻をほとばしらせている髪の毛。さらに背中から生えている莊嚴で尋常ならざる存在感を誇るオレンジ色の羽。それらを目の当たりにしたメリナは言葉を失って、その場に座り込んでしまった。彼女は口をうっすらと開けると、力ない指でカイルの輝く羽を示す。

「カイル……。お前、その羽はなんなんだ？」

「グウ？」

「ヒャッ！」

カイルはメリナの問いに、およそ理性の感じられないうなり声で答えた。メリナの方を振り向いたその顔の獣のように強烈な眼光と、いやに歪められた口が彼女に得体のしれない恐怖を抱かせる。思わずメリナは調子っぱずれな悲鳴を上げると、後ろへと下がった。それをカイルはぎらぎらとした目をしながら見つめる。そして彼は力ツカツと重い足音を響かせながら、メリナへと進んでいった。メリナはカイルのその透明感のない目を見つめて、何かを懇願するよう

なまなざしを彼に送る。唇が弱弱しく震えて、カイルへの言葉を紡ぎ出した。

「カイル？ お前は本当にカイルなのか？」

「……グラア……」

「おい、どうしたんだ！ おい！」

カイルはメリナから絶えずぶつけられる言葉をすべて無視した。彼は上半身をやけに大きく揺らしながら、ふわりふわりとした足取りでメリナの元へと歩み寄っていく。メリナはそうして近づいてくるカイルをじつと見詰めた。だがその目は先ほどまでの茫然としたものとは異なり、確固たる意志を感じさせるものだ。

カイルはメリナの前に立つと、彼女の首根っこをつかんだ。彼は片手で軽々とその戦士の割に華奢な身体を持ち上げると、拳を握りしめる。そしてその硬い拳を思い切り振り上げ、メリナの顔をめがけて放とうとした。その時、メリナはただカイルの瞳を見据えていただけだ。差し込む朝日のような、まっすぐに強い意志の込められた瞳で。

メリナの瞳から一滴の涙がこぼれおちた。澄み切った雪解け水のように純粹で、輝くクリスタルのように美しいそれははらと頬をしたたりおちる。カイルはそれが落ちていくのをじつと凝視していた。彼は少し、人間らしさを取り戻したかのような目でそれが床に落ちて弾けるのを見送る。その瞬間、彼は拳をほどいて頭を抱えた。

「……ググアッ！」

「大丈夫か！」

床に倒れ伏しのたうつカイル。それを見たメリナはとっさに彼を抱きかかえてやった。その間にも彼は口から絶え間なく絶叫を響かせ、手足を振りまわす。その目はわずかに理性を取り戻しつつあった。メリナはそれを見て取ると、恐ろしい力で暴れ続けるカイルを辛抱強く抑え続けた。すると、徐々にではあるがその暴れていたカイルが収まってくる。メリナはここぞとばかりに力を強めて、彼を床に抑えつけて安定させようとした。だがしかし、ここでカイルの目つきが変わる。彼は一瞬目を細めると、再び野獣のように鋭い目になった。

「ウアアアアア！！！！」

「くうっ！」

カイルは雄たけびとともにメリナの身体を払いのけた。メリナは吹っ飛ばされて、また床にたたきつけられてしまう。彼女の口から呻きとわずかだが血が漏れ出した。しかし、カイルはそんな彼女には構うことなく視線を上に向ける。その先には、すでに明るくなってきた空にまるで一等星のように輝く青い球体があった。青く澄んだ光を放つそれは空に浮かぶ炎の塊のようで、大きさはとても大きい。直径がカイルの背丈の五倍はあるうか。カイルはその異様な物体をより詳しく見るべく目を細める。

細められたカイルの視界に、先ほどの青い球の正体が映し出された。黒い罅だらけの装甲に身を包み、全身から匂い立つかのような醜悪な黒みがかった血を流す機械兵。その手のひらから展開され、今も大きさを増している強力無比であろうエネルギー弾というのが

この球の正体だった。カイルはその正体を知るや否や、背中の羽を力強くはばたかせて空へと舞い上がっていく。彼はどんどんと高度を上げ、塔が軽く見下ろせる高さにまで来た。それと時を同じくして、タイミングを見計らったかのように機械兵の手から青い球が放たれる。

巨大な山が高速で動けばこのような音がするだろうか。エネルギー弾はあたりを揺さぶるような轟音を響かせながらカイルへと迫ってくる。弾を中心に竜巻のような暴風が吹き荒れ、星が降ってきたかのような青白い光が周囲へ放射される。青空は白に閉ざされていき、浮かんでいた雲は水面に石が落とされたかのように円を描いて消えて行ってしまった。カイルはそうしてさながら隕石のように迫りくる弾に向かって手のひらを突き出す。彼はこの弾を受け止めるつもりのようなだ。

「ウグオオオオオオ！！！！！！」

空全体へと轟き渡る咆哮。カイルの手のひらが青く燃える球の表面に触れ、強烈な衝撃がほとばしった。背中の羽がオレンジに燃えて、太陽をも倍する光をまとう。その足は地をとらえてはいなかったものの、代わりに羽が圧倒的な力を持つてカイルの身体を支える。青い球はカイルの手のひらを中心として大きくたわんで、少しずつ押し戻されていった。カイルの高度がほんのわずか、数十センチ単位ではあるが上がっていく。

「魔力ジェネレータ出力アップ、最大パワー……！」

上空でカイルとエネルギー弾の様子を観察していた機械兵が、無機質な音声を発した。機械兵の損傷していない方の手から青い霧のようなオーラが放たれて、エネルギー弾の表面へと吸い込まれてい

く。ドンと響く音とともに、青い球体は輝きと大きさを大幅に増した。カイルの身体が押し返され始めて、その高度を下げ始める。

塔をはるかに見下ろす高さにまで上昇していたカイルだったが、ついにその足もとに塔が迫ってきた。彼は絶叫して腕に力を込めるものの、エネルギー弾の力は想像を絶するもので、まったくびくとしなかった。そのまま彼は塔のすぐ真上あたりまで高度を下げてきてしまった。彼はとつさに後ろを振り向き、塔の様子を確認する。すると彼の目に、茫然とするメリナといまだに起き上らないゲーツとアイスの姿が飛び込んできた。それを見たたん、カイルの中で再び何かが燃え上がる。

羽が輝きを増し、塔を覆い尽くさんばかりに広がった。それはさながら天使の羽のように、神々しくなおかつ壮麗にして美しかった。光の結晶のようなその羽はスツと風を切ると、あふれんばかりの力をカイルに与える。カイルの全身がやわらかな陽光のような光に包まれて、腕から閃光が放たれた。青い光はオレンジ色の光に圧倒され始めて、球が再びはるか上空の機械兵へと上がり始める。

カイルがいまひとたびの咆哮を上げた。青い光はいよいよ勢いを増して上空へと向かって突き進む。機械兵がおぞましい憎悪にまみれた雄たけびを上げるが、その速度がゆるむことはない。そしてあつという間に機械兵のもとへと到達したエネルギー弾は、機械兵の身体を包み込んでいった。黒い装甲が次々と爆発して飛び散り、機械兵はその醜悪な内面を周囲に晒し出す。

それは病的に白い、痩せこけた人間の肉体のようだった。髪はそりあげられている上に細かいところがないが、その華奢な様子から言ってその肉体は少女の物のようだった。だが、それは一瞬にして自ら放ったはずの青い炎に焼きつくされて灰と消えていく。

ものの数秒で、機械兵は飛び散った装甲のわずかな残骸と、血肉が燃え尽きたような異臭だけを残してこの世から葬られたのだった。

「ウッ！」

一方のカイルも、今度こそ完全に力を出し尽くしたようだった。背中から羽が消えて、瞳の色も元に戻る。そうしていつもの状態へと無事に戻ったカイルは、はるか上空から塔の上へと墜落した。カイルが空から落ちてきたことにあわてたメリナがとっさに駆けよってその様子を確認する。しかし、幸いなことに彼女が見た限りではカイルにけがはなかった。それどころか、おどろくほどのんきな顔をして穏やかな寝息を立てていた。

「まさか寝るとは……。本当にいろいろと驚かされるやつだな……」

メリナはそう深くため息をつく、運よく残されていた彼女のかばんへと向かった。そこからポーションの瓶を取り出すと、一気に飲み干す。すると少しだが蒼白になっていたメリナの顔に赤みがさした。元気をわずかだが取り戻した彼女は、ほかに倒れているゲーツやアイスにもポーションを飲ませてやった。意識を取り戻したゲーツやアイスは機械兵がいなくなっていることを知ると、顔に頬笑みを浮かべる。そして、メリナも一緒になってまだ寝ているカイルの脇で勝利の味をかみしめた。こうしてカイル達はどうかこうにか、機械兵を倒すことに成功したのであった――

第十五話 始祖咆哮（後書き）

機械兵の放ったエネルギー弾は元〇玉みたいなものをイメージします。

作者はあの漫画が大好きなので、影響を多分に受けとります

第十六話 明かされゆく世界（前書き）

今回は設定の説明が主となっております。話はほとんど進みませんが重要な設定なので読み飛ばさないでくださいね。

第十六話 明かされゆく世界

「うつつ……。ここは？」

カイルが頭を押さえながら身体を起こすと、あたりには白い空間が広がっていた。広大無辺で果てがないかのようにその白は延々と続いている。カイルはその空間を見ると、すぐにその正体に気がついた。この世界にきて初めての夜に見た、彼の精神世界だ。彼はそのことを理解すると、この精神世界の住人であろう名も知らぬ少女のことを考える。すると、まだ来てくれと声にも出していないうちから彼の前にポンッと少女が現れた。

「おわっ！……なんだ、君か。まだ呼んでないのによくここがわかったね」

「心を読んだもの。それより、さっきは私の忠告を無視したわね」

「さっき……？」

カイルは不思議そうな顔をして首をひねった。少女はそれを少しあきれたような顔をして見る。彼女は大きくため息をつくと、指をパチンと鳴らした。するとどうしたことだろうか、カイルが頭を抱えて呻く。顔を苦悶にゆがめながら、彼はそうしてしばらく声にならない叫びを上げ続けた。少女は彼の顔を不安げに覗き込むと小声でそつとささやく。

「記憶、戻ってきた？」

「ああ……。くそつ、どうして僕はあんな獣みたいなことに……」

「心のタガを無理にはずして魂の力を直接解放したんだもの。むしろ、今こうして理性を保てている方が奇跡的」

「心のタガとか魂の力とか……。よくわかんないよ、説明してくれないか」

「あなたたち人類は自分たちに関することすらまともに知らないのね。仕方ない、一から説明してあげる」

少女はあきれたように両手を上げると、その指を鳴らした。白い世界がにわかには黒い闇に沈んでいき、その中に幾千もの光が浮かぶ。赤から青まで虹色の輝きを放つそれらは星のようであった。さらに、カイルの視線の端にはぼんやりと光る帯状の天の川まで見える。白い世界が一瞬にして宇宙空間へと姿を変えたのだ。カイルは驚きのあまり目を見開くと、少女の顔をあつけにとられたように見ると、少女はいかにも真剣な顔をして口を開いた。

「ここに写されているのは原始宇宙。今から百三十億年も前の時代の光景よ。あなたたちのことをわかりやすく説明するためにはこの時代まで遡らねばならない」

「百三十億年前って、人類誕生どころか地球ができる以前の話じゃないか！」

「いいから、私の話を聞いて」

カイルの言葉に、少女はここで一呼吸ほどの間をおいた。カイルは彼女をいくぶんか疑わしい目で見ると、しかし少女はしばらくすると、そんなカイルの視線のことなど関係なく話を再開した。

「この時代の宇宙はまだきわめて不安定だった。現代では消滅してしまっている虚数物質がまだこの時代には膨大な量が存在していて、それが宇宙を埋めて混沌の海とでもいうものを構築していたの」

「混沌の海？」

「そう、混沌の海よ。あらゆる可能性が無秩序に入り乱れる場所。高次元量子が極限まで乱れた環境にある場所ともいえる。けどこの時代、そんな混沌の海にある種の規則性を持ったパルスが生まれた。それはやがて知性を獲得し、膨大な力を持つようになったの。この存在が、のちにあなたたち人類を生み出したのよ」

少女の話がここで少しばかり途切れた。カイルは一瞬だけぼかんとする。直後、彼は少女をわずかばかりだが馬鹿にしたような視線で見た。その口元は少しばかり歪んでいて、笑いをこらえているようだった。そのカイルを、少女はむっとしたような顔で見つめ返す。彼女はそのまま、怒ったような声でカイルに話しかけた。

「信じていないのね」

「だって、人間は自然の進化の産物だって進化論で証明されているじゃないか。アルカディア世界の住人ならともかく、地球人が神みたいな存在に造られたとかありえないよ」

「進化論は正しい。けれど、その進化自体が仕組まれていたの。たとえば、あなたはミッシングリンクというものを知ってる？」

「さあ、知らないよ」

「進化の間にある欠けてしまった部分のことよ。たとえばキリン。キリンはもとも首が短かったのだけど、木の葉を食べるためにだんだんと首が伸びて今の姿になったといわれているわ。だけど、首の長さが中途半端なキリンの化石は見つかっていない。これがミッシングリングよ。生物が自然に進化したのならばこういうことはありえないはず」

カイルはむむつとばかりに呻った。彼は頭をフル回転させて少女の言うことを検討してみる。人類を生み出した超越存在、ミッシングリング。そして人類を生み出すために仕組まれた進化……。荒唐無稽だが、カイルには少女の言うことはある程度は筋が通っているように思えた。それに、今まででも異世界に來ているという不思議現象を彼は体験している。今更ではあるが、少女の言うことは真実かもしれないとカイルには思えてきた。

少女はそんなカイルの心情を察したのか表情を緩めた。彼女は再び指を上げると、空中でぱちりと鳴らす。すると今度は青い星の映像が映し出された。青の中に緑の大陸と白い雲の広がる光景は衛星写真などで見慣れた地球の姿に相違なかった。カイルは間近で見るその姿に神々しさを感じると、視線を奪われてしまう。少女はそんなカイルの方を見ながらわずかばかりほほ笑んだ。そしてたたみかけるように話を再開する。

「今から三億年前、地球で海ができあがってきたところに神は地球に隕石を落としたわ。その中に含まれている有機アミノ酸があなたたち生命の素となった。そしてその生み出された生命は進化の果てに人類、ホモサピエンスへと行き着いたの。神はそうして生まれた最初の人類をアダムと名付け、自身の持つ力を分け与えた。さらに神は彼にあなたたちが魂やアストラルと呼ぶ高次元の意識体をも与えたのよ」

「……それって要は人類はキリスト教で言われてるみたいにほんとに神の子供だったってこと？」

「そういうことよ。だから神の系譜を引くあなたにはさつきみたいな力があるの」

「でもさ、地球にはあんな能力を使える人間なんていなかったよ？」

少女の顔が曇った。彼女は大きく眉をゆがめると、肩をすくめる。その口からはとても大きなため息が漏れた。カイルは何か聞いてはいけないことを聞いてしまったのかと、顔を不安げにゆがめる。すると少女は顔を引き締めてカイルの方を見つめた。カイルもまた、真剣な表情をして彼女の視線にこたえる。

「嘆かわしいことに、力を与えられた人類は傲慢になった。彼らは超高度文明を築きあげてエデンと呼ばれる巨大国家を造ったものの、それは数千年のうちに滅び去ってしまったわ。神はそのことを反省し人類の力に制限をかけ、肉体の制限を超えた力を使えないようにしたの。だから地球でのあなたたちはほとんど力が使えないのよ。逆に、この世界のあなたたちの肉体は能力が割合高いから魔法という形である程度力を使える」

「なるほど……」

カイルは納得したような顔をして、ふむふむとばかりに何度もうなずいた。少女はそれを見て満足そうに顔をほころばせる。そうしてほほ笑んだ彼女は、まだ足りていない説明を補足するために再び話を始めた。

「ただし、この世界ではその封印は緩んでしまっているわ。だから感情がある程度高まってくると、抑えきれない力があおして暴走してしまうことがある。しかも厄介なことに理性や知性はもとも力を抑えつけるために人に与えられたものだから、魂の力とは相反する関係にあるの。ゆえに、力が暴走した状態になると理性や知性は失われてしまう」

「へえ、それは厄介だなあ……。でも、地球じゃしっかり封印がかっているのに、どうしてこの世界だと封印が緩んでるのさ」

「それはね……。この世界が不完全な神によって造られた世界だからよ」

「不完全な神？」

「ええ、そうよ……」

少女は額に皺を寄せると、顔をうつむけた。肩はすでに竦められていて、小さく震えている。まるで、何かを嘆き悲しんでいるかのようだ。その悲痛な様子を目の当たりにしたカイルは殊勝な表情になると、少女の方にまっすぐなまなざしを向ける。すると、少女は顔を上げて指を鳴らした。周りの景色が歪み、再びどこか別の場所のものへと変わっていく。

カイル達の視界に映し出されたのは異様な機械の群れだった。四角い箱型の機械が、白い部屋に見渡す限りに広がっている。その一つ一つは人間の背丈を倍したほどの高さで学習机ほどの幅や奥行きがあり、異様なまでの存在感を放っていた。銀のメタリックカラーの表面が部屋の蛍光灯をいやに反射して、つけられているランプなどが不気味に輝く。カイルはそれに嫌なものを感じ取ると、少女の

方を見た。

「これは？」

「あなたがプレイしていたアルカディアを構成しているコンピュータの一部よ。本質的なことを言ってしまうえば、愚かな人間が造り出した神への祭壇といったところかしら」

「神への祭壇って、アルカディアはただのゲームだったんじゃないのか！」

カイルは茫然と立ちつくした。もはや、言葉もない。彼はうつろなガラス玉のような目でひたすら少女を見つめる。今まさに、彼の中では何かが音を立てて崩れていこうとしていた。つい先日まで遊んでいたアルカディアの世界が急速に遠ざかっていく。想い出はまたたく間に色あせて、セピア色に変化していった。彼はもう、何かなんだかよくわからない。少女はそんな混乱するカイルの方に近づいていくと、その頭に人差し指を当てた。その瞬間、彼の頭の中がスツとさえていく。にわかに着きを取り戻した彼は、青い顔と荒い息をしながらも光のある目で少女の目を見た。

「落ち着いた？」

「なんとかね……」

「そう、ならば話をつづけるわ。アルカディアは神を生み出すことを目的として作られた装置なの。量子コンピュータで原始宇宙の混沌の海を再現し、さらにそこに億単位の人間の意識体を投入することで自分たちに都合のいい神を造り出そうとしたのよ」

「そ、そんなこと不可能だろ！ それにどうしてそんなことを！」

「装置制作のヒントとなる預言書があったの。エデン文明の時に造られた第四エノクと呼ばれるその預言書は、大戦期にナチスによって管理していたユダヤ人の手から奪い取られた。そしてその当時から現代にいたるまで神を生み出すための研究はドイツから日本へと舞台を移しながらも連綿と続けられ、その結果アルカディアが誕生したの。アルカディアがVRMMOを装った理由は、おそらく多くの人間の意識を投入する必要があったからでしょうね」

少女の口調は重々しかった。カイルはその話を聞き終わると、いっになく神妙な面持ちになる。彼の額には深い皺が刻まれて、口は真一文字に結ばれる。彼はそのまま、固まってしまったかのようにしばらくの間黙っていた。少女もまた、カイルと同様に静かに黙っていた。だが、やがてカイルの方がゆっくりと薄く口をあける

「……もしかして、さっきいった不完全な神っていうのはその研究の結果生み出されたものなのか？」

「そうよ、連中の思惑は成功して不完全ながらも神が生まれた。だけど、その神は制御不能になってしまっただけ。その結果、新たな神はアルカディアの膨大なデータを利用して新たにこの世界を生み出したの。始祖と呼ばれる存在はこの時この世界に取り残されたプレイヤーたちのことなのよ」

「そうだったのか……。これでどうしてこんな世界が存在するのかの謎がわかったよ、ありがとう。でもさ、ついでに聞きたいんだけどなんで僕だけがこの時代に来たのかな？ ほかのプレイヤーとは違うみたいなんだけど……」

「この世界が創造された瞬間、あなたの魂の力が神の力に反発して時を超えたんでしょ。でも、どうしてただの人間であるはずのあなたにそこまでの力があるのかは私にはわからないわ。でも、あなたの力は今後の役に立つ。そのぐらいの力がなければ咎人を倒すことは不可能なもの」

「咎人ってこの間もいってたけど、一体なんなのさ？」

少女はすぐさまカイルから目をそらした。彼女は露骨に顔を曇らせると、そのままそっぽを向いてしまう。カイルはそんな態度を示した少女を不思議そうな顔をしてみていた。すると、少女がなにやら早口で言う。カイルはそれを聞き逃さないように、耳をすませた。

「咎人の正体についてはまだ明かせない。ただ言えることはあの機械兵など比べ物にならないくらい強いということと、勝つためには私の力が必要ということ。アルガイネに来て、その時に咎人のことを教えてあげるわ。だからそれまでの間は力の制御に気をつけていてね」

少女はそれだけ言うと、指を鳴らした。映し出されていた風景が消えうせて、白い世界へと回帰する。カイルはその変化に目を奪われていた。その隙を見ていたのかはわからないが、カイルがそうして横を見ている間に少女の姿は薄くなつていつてしまふ。カイルが少女の存在を再び意識したときには、もう少女はうつすらと蜃気楼のような状態になつていた。

「ちよつと待って！ 最後に名前だけでも教えてよ！」

「……ラジエル……」

春風のように透き通る声と意味深げな名。それを残して少女の姿は白にかすんで消えた。カイルは何か決意を固めたような目で、少女が消えた後の何もない空間を見据える。その時カイルの目はとても鋭く、燦々とした光にあふれていた。そしてしばらくすると、彼の意識もまたぼやけて白にのまれていった。意識は深層心理の下にある精神世界からぐんぐん浮上して、どこかぼやけたようであった身体感覚が鋭敏になっていく。こうして、カイルは現実の世界へと帰っていったのであった――

第十六話 明かされゆく世界（後書き）

……正直、今回書いた設定をここで明かすのは迷いました。

ですが、この作品は設定がかなり多いのでここらで少しずつ明かさないと最後までに広げた風呂敷がたたみきれない可能性があります。なので今回このタイミングで設定を一部明かすことにしました。

むろん、今回明かされなかった設定については今後の楽しみということでお願ひします。

第一部完 青き紋章のもとに（前書き）

今回の話で一区切りつきます。といっても第二部があるのですが

第一部完 青き紋章のもとに

ふにふにと何かやわらかいもの。大きさはミカンより二回りほど大きいぐらいだろうか。カイルは目を覚ますと同時に、顔の上にそんな物体の存在を感じた。それはとてもやわらかいのに適度な弾力があり、カイルにとってなんと心地よいものだ。顔全体を包み込まれるような格好となっていた彼は、その至福の感触をもっと味わおうと二つあるその物体のはざまにさかんに顔を押し付ける。二つの物体はふにやっとたわんで、その中にカイルの顔はまるでおぼれたようになった。彼の顔は幸せいっぱいになり、ニヤツと歪んで、鼻の下が思わず伸びきってしまう。するとその時、カイルの顔の上から甘く眠たそうな声がした。

「ふああ……。あかん、寝てもうたみたいやわあ……。うぬ？」

「……ア、アリアさん……？」

カイルはぼかんと目の前にいるしなやかな栗色の髪が特徴的な女性を見た。間違いなく、青の旅団のマスターであるアリアである。アリアの方もまた、自分の胸に埋もれて幸せそうにしているカイルを見た。彼女の色白の顔が燃えたように紅く染まり、目の色が変わる。だが、目をまんまるにして固まったカイルをみると、たちまちそれは収まって代わりにからかうようなほほ笑みがアリアの顔を埋めた。彼女はその笑顔のまま、いたずらっぽい目でカイルを見る。彼女の華奢で小柄な体はカイルによりしっかりと寄り掛かった。猫のような丸いアリアの顔が、ちょうどカイルの真上にやってくる。

「……カイル、いまうちの胸に顔をうずめとったやろ？」

「そ、そんなことないよ！」

「別に照れんでもええのに……。カイルならちょっとぐらい好きにしてもええんやで？」

「ええっ！ いや、いきなりそれは……」

カイルは顔を紅くしてアリアから目をそらした。そのまま彼はしばらくぶつぶつと何かを小声でつぶやき続ける。その体は不自然にもじもじと動いて、軟体生物のようだ。アリアはそんな動揺しておかしくなっているカイルの様子をひとしきり楽しむと、彼の頭を指で軽く小突く。そしてあわてた様子で振り向いた彼に向かって、いたずっぽく笑いかけた。

「もう、「冗談やで！ほんとに悩むなんてカイルはかわいいんやから。……っっておぶざけはこれくらいにしようか」

「あつ、はい」

「べつに返事は何でええよ。それより体は大丈夫なんか？ 三日間も寝てたんやで」

「えっ……」

はっとしたカイルは改めて周囲を確認した。白い清潔なシーツのしかれたずっしりとした高級感のある木のベッドに、殺風景だが白を基調として清潔な雰囲気で整えられた室内。大きな窓からは日光が外から燦々と差し込み、彼のベッドのすぐわきにあるサイドボードには果物が置かれている。さきほどまでは興奮のためまったく頭

が回っていなかったカイルだが、冷静さを取り戻すとさまざまなことを把握することができた。どうやら、彼は塔での戦闘で無茶な覚醒をしたことが原因で、病院にあたるような施設に入れられていたようだ。しかも、アリアの話だと三日間も寝ていたらしい。

そこまで考えたところで、カイルの頭の中をふつとメリナをはじめとする仲間たちの姿がよぎった。彼の背筋を冷たいものが走り抜ける。彼はすぐさま隣にいたアリアの肩をつかむと、それをぶんぶんと振った。さらに彼は血走ったような必死な目で彼女の顔を見ると、舌を噛んでしまいそうなほどの早口でまくしたてる。

「僕は大丈夫だよ！ それよりみんなは？ みんなはどうなったのさ！」

「ああ、もうそんなに頭を振らんといてや！ 大丈夫、みんな元気してるから！」

「そうなんだ……よかった……」

カイルはほつと胸をなでおろすと、ずっと握りしめていたアリアの肩を離した。アリアはにいつと恨めしげな顔でカイルを睨む。彼女はそのままふくれっ面になると、姿勢を正して椅子に座り直した。カイルもまたそんな彼女の様子を見て、乱れていた布団を整頓するとベッドの上で器用に正座する。そのときカイルの顔がわずかばかり緊張の色を帯びた。

「まったく、あんなに頭を振られたらこの天才的頭脳がパアになってまうやろ！」

「すまなかった。ごめん……」

「そうやって素直に謝ってくれば許したるよ」

「ありがとう。それでさ、みんなは今どうしてるの？」

「メリナたちなら今は思い思いに過ごしてると思うで。ひどい怪我しとったけど、医務室で治療魔法を受けさせたらケロッと治ったんや。むしろカイル、あんたの方がみんなに心配されとったんやで？」

カイルは心底意外そうな顔をした。もともと男にしては丸い大きな目がさらに真ん丸になり、口が少し開く。アリアはそんなカイルの顔を見ると額に指を当て、豪快なため息をついた。その表情は「こりゃだめだ」とでも言わんばかりである。彼女はそのままあきれたように声を出した。

「当然やろ、三日も寝とったんやから。メリナたちはみんな何回もあんたの見舞いに来てたんやで」

「みんな結構僕のことを心配してくれてたんだ……」

「うん、それはもう心配してたんやで。とくにメリナなんか昨日もおとといも徹夜でここにおったくらいなんよ」

「-あのメリナさんがねえ……意外だなあ……」

カイルはベッドのわきで寝ている自分を看病をしているメリナを想像してみた。すると彼の頭の中で、ぶつぶつ文句を言いながらも病室に入り浸る彼女の姿が鮮明に現れる。カイルはそうしているいると世話を焼いてくれたであろうメリナのことを考えると、胸があ

たたくなり感謝の念が湧いてきた。だが同時に、カイルはそうして病人相手に世話を焼く様子が普段のメリナのイメージにあまりに合わなかったので、頬が少し緩んでしまう。アリアはそうして緩んだカイルの表情を見逃さなかった。彼女もまたカイルと同じようにニヤツとすると、彼に向かってすこしたしなめるような口調で言う。

「そんな意外そうな顔したらあかんで。メリナはああ見えても女の子っぱいいんやから。それに……」

「それに？」

「いや、なんでもあらへんで！ 言ったらメリナに殺されてまうんやから！ …… そんなことより今、どうしてメリナがいないのかとか気にならないの？ 普通やったらメリナがうちがおらんでメリナがここにいるはずやで？」

アリアはあわてた様子で無理やりに話題をそらすと、カイルから目をそらした。カイルはあまりに露骨な態度をとられたので、彼女が何を言おうとしたのかが気になってしょうがない。なので彼はアリアにもう少しそのことについて追求してみようとした。だが、それと同時にアリアの言ったどうしてメリナが今いないのかということも気にかかってしまう。頭の中で取捨選択した結果、仕方なく彼はさきほどの「それに」の先を聞くことをあきらめて、メリナがいまここにいない理由を聞くことにした。

「……じゃあ聞きますけど、なんでメリナさんはいないんですか？」

「そうそう、それでいいんや。メリナはいまミースと一緒にあんたのためにいろいろと準備をしてるところや。だから、暇なうちが代わりに看病をしてたんやで」

「……ギルドマスターなのにアリアさんは暇なんだ」

「う、うるさい！ 今日はたまたま暇だっただけや！ いつもはええつと……ギルドの警備とかいろいろ働いてるんや！」

「えつと、自宅警備員の亜種？」

「……………」

カイルの言葉で、アリアは一瞬にして石化した。彼女は一言「もう知らん！」と言い残すとカイルと目を合わせないようにして、逃げるように素早く病室を出ていく。静かになった病室には、一人あきたような顔をしているカイルだけが残されたのであった――。

カイルが目覚めた翌朝。無事にギルドの医務室から退院した彼は、カウンターのがあるギルドの大広間に来ていた。その彼の傍らには昨日のうちに再開していたメリナが立っている。昨日のうちに、メリナとカイルは再会を済ませていたのだ。その時に、メリナの目がわずかに潤んだことをカイルは強く心に刻み込んでいる。

そんなメリナは今、どこかほつとしたような様子でギルドの中を見渡していた。だが、それとは対照的にカイルは精悍で引き締まった表情をしている。その手には、昨日の夜にメリナから渡された青い宝石が握りしめられていた。

「ミースの奴、ずいぶん遅いな。ひょっとして仕事をさぼる気なのか？」

「そんなわけないと思うけど……。それにしてもちよつと遅いね」

カイルとメリナはまだ誰もいないカウンターに不安な顔をした。日はすでに高くなりつつあり、通常ならミースが受付の仕事を始めていて当然の時間のはずだ。現にギルドの中にはカイル達のほかにも数人だが人がやってきている。メリナの記憶が正しければ、ミースはいつもだれよりも早くにギルドへやってきて仕事をしていた。

そうしてしばらくカイルとメリナが不安なまなざしでカウンターを見つめていると、その奥から見慣れた少女が翡翠色の髪を揺らし現れた。その小柄な体格と眠たそうな顔は間違いないくミースのものである。カイル達はひと安心した様子でカウンターの方へと歩いて行った。

「遅かったじゃないか。寝坊でもしたのか？」

「まさか。マスターが仕事をさぼってたから私が代わりに仕事したのよ。おかげで遅れたの」

「マスターにも困ったものだ……。ほんととはしっかりしてるはずなのだが……」

「ほんとにあの人は働かなさすぎだもの……」

メリナとミースはそのままアリアの話題で話に花を咲かせようとした。しかしその時、横で硬い表情をしていたカイルが二人の間に

不満そうな顔をのぞかせる。二人はあつと口を押さえると、メリナはカイルに場所を譲った。

「登録の準備はできてる。さっ、宝石を出して」

「はいっ！ これでいいよね？」

「大丈夫、間違いないわ。おめでとう、入団試験はクリアよ」

ミースは宝石を確認すると、やわらかなほほ笑みを浮かべた。その顔は口元がわずかに歪められているだけなのだが、降り注ぐ春の日差しのような暖かさを感じさせるものだ。カイルもまた確かな優しさを持って笑ってくれる彼女に、自身ができる最大限の笑みでこたえる。隣にいたメリナもあまりなれないのかぎこちないものの盛大に笑って、あたりの空気はふんわりと和んだ。まわりにいた魔導士たちもどこから事情を聞きつけたのかカイルに祝福するかのような視線を送る。

そうしてあたりの雰囲気がよくなったところで、ミースがカウンターの棚からカードを取り出した。紺碧に輝くそれはとても薄く、カイルの手のひらほどに小さい。されどその正体をすぐに理解したカイルにとって、そのカードはまるで辞書のような厚みと重みのある物のように思えた。ミースはそんなカードをどこかうやうやさくさえある態度でカイルへと差し出す。

「ギルドカードよ。これで今日からあなたは青の旅団の一員。同じ紋章を掲げるギルドの仲間として、これからともに活躍していけることを期待してるわ」

「もちろんだよ！」

カイルは晴れやかな顔をしてミースに返事をする、きらきらと青く輝くカードを見つめた。思えば、彼がこのカードを手に入れるためにどれだけ苦労があっただろうか。彼の心を走馬灯のように今までの冒険の記憶がよぎり、彼は思わず感慨深い心持ちになる。その額には怒りの時とはまた違った深いしわが刻まれて、目はかすかに潤んだ。彼はしばらくそのままの状態で動きを止めて思考の海へと精神を沈める。

その時、メリナの手がカイルの肩にかけられた。彼女は懷から青いスカーフのような布を取り出すと、それを何も言わずにカイルの腕へと巻きつける。カイルはとっさに何をするのだろうかとメリナの方を見たが、彼女は笑って見つめ返すだけだ。そうしてメリナは手早くカイルの腕に布を巻きつけると、その肩をポンポンと叩く。

「なかなか似合うじゃないか。結構男前に見えるぞ」

「これはなんですか？」

「そうか、カイルはまだ知らなかったな。ほれ、あの横断幕をよく見てみる」

カイルは大広間の奥に高々と掲げられる横断幕を見た。青く染め上げられた絹のような光沢のある生地、魔法陣と魔導書を象った紋章が踊っている。カイルはとっさにその腕に巻かれている布をよくよく見てみた。すると横断幕に描かれているものと寸分たがわず同じものが、青い布にはつきりと描かれている。カイルはすぐ横で感慨深そうに目を細めて横断幕を見ているメリナに、あらためて視線を送る。すると彼女はすぐにカイルの方へと目を向けた。

「あの横断幕とおんなじ紋章？」

「ああ、そうだ。青の旅団に所属する魔導士はギルドの紋章を掲げるのが習わしなんだぞ。一応、私も紋章が入ったカバーを魔導書にかけている」

「なるほど！　ありがとうメリナさん！」

「た、大したことじゃない。それより、今から私たちはギルドの仲間なんだ。そのなんだ……これからはメリナさんじゃなくてメリナと呼んでくれ……」

「……わかったよ、メリナ」

カイルは舌足らずな様子でどことなく照れくさそうに言った。その途端、メリナの頬がカツと燃えたように紅くなる。カイルはその様子を見て、少しおかしかったのか口を押さえて笑う。それにいられたのか近くにいたミースが大笑いをして、ギルドの中にいた魔導士たちへもその笑いは広まっていった。たちまちのうちにギルドの中は笑い声に包まれて、いつにもまして穏やかで平和な時が流れた。カイルはいままでの苦勞を思い出しながらその穏やかな時をかみしめると、真剣でなおかつ明日への光に満ちた目をする。

そのカイルの決意に満ちた姿やギルドのほかの魔導士たちを見守るかのように、青い紋章を象った横断幕は広間をすぎるかすかな風にふわりふわりとゆれていた。いまだ青の旅団の魔導士たち、いやこの世界全体に迫る大いなる危機のことを知らずに――。

第一部完 青き紋章のもとに（後書き）

……ようやく第一部完結です。正直、ギルドに入るまでで終わる部でしたのでここまで長くなるとはちょっと想定外でした。

次回からは第二部となりますが、これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5123t/>

青輝のラジエル

2011年7月2日23時20分発行